第七十五　橘南蹊（宮川春暉）

字ハ惠風、姓ハ橘、因テ自ラ橘南蹊ト號ス、又梅仙ト號ス。伊勢ノ人、產レテ七歲、父孟子ヲ讀ム、春暉適々傍ニ在リ、父羊ヲ以テ牛ニ代ユルノ章ヲ語ル、先生默シテ其義ヲ了ス、人之ヲ奇トス。年十四五歲ニシテ父ヲ失フ、家計豐ナラザレバ醫業ヲ職セント志ス、十九歲京都ニ上ル、母恒ニ戒メテ修業ヲ勵マシム。先生夙ニ香川太冲ニ私淑シ、文質兩ツナガラ備リテ漢土ニ愧ヂザルハ太冲アルノミト謂ヘリ。天明元年母歿シ、今ハ孝養ノ絆モ斷タレ、繫累ノ煩モナキニ至レバ、同年西遊ヲ思ヒタチシガ、未ダ其機ヲ得ザリキ。翌二年秋、門生文藏ヲ伴ヒ九州ニ遊ビ、天明三年秋再ビ京都ニ還リテ西遊ヲ遂ゲタレバ、更ニ天明四年ノ秋、門生養軒ヲ隨ヘテ東遊シ、翌五年三月仙臺ニ到リ、九月ヨリ五年三月ニ至ルマデ奥羽北端ヨリ北越中越ヲ巡レリ。先生深雪征途ニ迷フ時ヲ選ビシハ醫術修業ノ爲メナリト、三月越後ヨリ佐渡ニ渡ラントシ颶風ニ遇ヒテ止ミ、加賀ヲ經テ越前・近江ヲ廻リテ歸洛セリ。

ソノ西遊、東遊合セテ五年、ソノ他南紀ノ歷遊ヲ併セテ漫遊スルコト前後四度ニ及ベリ。ソノ東遊ヲ畢ヘテ歸京セシ後、專ラ醫業ヲ營ミ、又尙藥ニ任ゼラレ、石見介ニ敍セラレタリ、後チ著述ニ心勞セシガ、偶々宿痾ニ苦シミ、遂ニ致仕シテ薙髮セリ、年四十四。文化二年四月十日遂ニ歿ス。其生年ヲ詳セズ。

著ス所ニ、雜病記聞・橘氏醫話・藥量考・讀產論・方意辨・度量衡考・辨意漢語律呂考・藥方小牋・痘疹玉環・方痘疹水鏡錄・傷寒外傳・傷寒論邇言・傷寒論文註アリ。

第七十六　小石元俊

名ハ道、字ハ有素、大愚、又碧霞ト號ス、元俊ハ其通稱ナリ。寛保三年九月十六日ニ生マル、年八歳父ニ從ヒ大阪ニ遷ル、淡輪元潛・永富獨嘯ヲ師トシ醫術ヲ學ブ。年二十一父ヲ失フ、後チ母ノ稱贊ニヨリ西遊六年ニテ歸阪セリ、年三十四、母モ亦病死ス。年四十一小關氏ノ女阿柔ヲ娶ル、越テ二年小關氏病デ歿ス、是歳九月兒ヲ他ニ托シテ江戸ニ遊ビ、翌年ニシテ西歸シ京都ニ復ル、年四十八。再ビ小關氏ノ女ヲ娶ル、年五十二、病アリテ城崎溫泉ニ遊ブ、文化五年十二月二十五日歿ス、年五十四。

第七十七　小野蘭山

名ハ職博、字ハ以文、蘭山又朽匏子ト號ス、通稱喜内ト云フ、後チ蘭山ヲ以テ通稱トス。享保十四年八月二十一日京都ニ生マル、年十六松岡恕庵ニ業ヲ受ク、未ダ二年ナラズシテ恕庵死ス、爾來獨學、年二十五、河原町夷川ノ北ニ居ヲトシ帷ヲ下ス。

寛政十一年幕府先生ヲ江戸ニ徵シ、醫學館ニ本草ヲ講ゼシメ、月俸三十圓歲銀二十枚ヲ賜フ。寛政十二年ノ春ヨリ文化三年ノ夏ニ至ルマデ諸國ヲ跋涉シ、五旬或ハ十旬ニシテ歸リ、其採ル所ノ品目ヲ疏シテ編シテ一書ヲ成シ上進ス。常野採藥志採藥志ノ書コレナリ。

寛政元年八月門人相集マリテ先生ノ六秩ノ祝筵ヲ張ル、同十年古稀ノ賀宴ヲ開ク、此時先生草木十種ノ新考ヲ撰ブ門人百口俊道模寫シテ上梓ス、題シテ十品考ト曰フ。文化五年八秩ノ賀筵ヲ開ク、耄筵小牘ノ著アリ。文化七年一月二十七日朝溘焉トシテ逝ク、年八十二。

著ス所ニ、本草綱目啓蒙飲膳摘要十品考百品考藥名考耄筵小牘廣參說本草譯說本草會識本草紀聞本草綱目辨談格物徵松軒愚筆衆芳軒雜錄アリ。

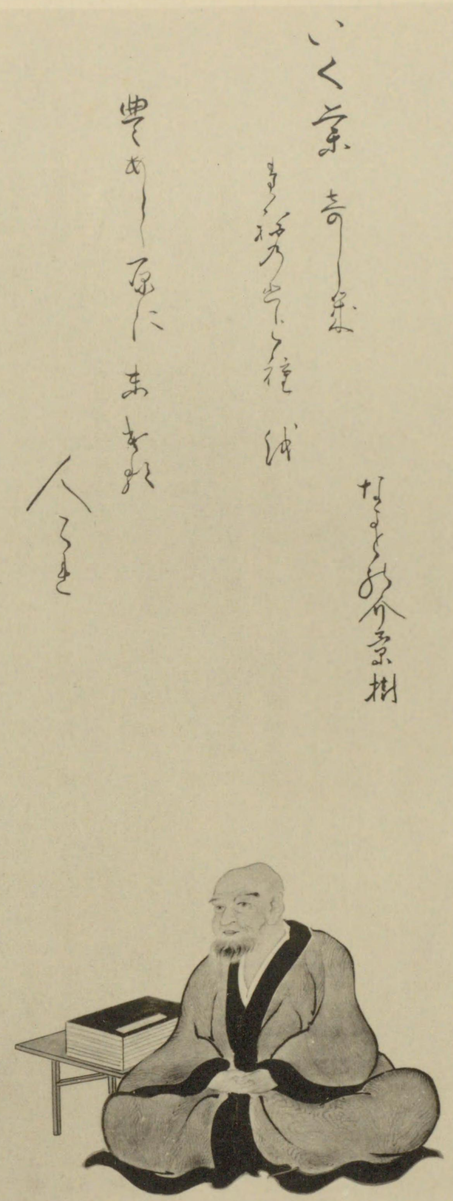
第七十八　緒方春朔

名ハ維章、洞雲軒・濟庵・混鄕ノ別號アリ。本姓丸林氏、筑前秋月ノ人、長ジテ長崎ニ往キ、吉雄氏ノ門ニ入リ種痘法ヲ修メ、刻苦多年其術妙ニ達ス。寛政元年、緒方元齋ニ養レテ其姓ヲ冒ス、黑田侯ニ仕ヘ、信任厚シ。是ヨリ洽ク藩內ニ種痘ヲ實施シテ人命ヲ救濟セリ、ソノ法創始ニ出ヅ。兼ネテ天文推步ノ學ニ通ジ、天球・地球兩儀ヲ製シテ人ヲ驚嘆セシム、寛政六年江戸邸ニ祇役セシ以來、種痘術ヲ都ニ傳ヘテ聲名嘖々タリ。文化七年一月二十一日歿ス、享年六十三。

第七十九　多紀安長

名ハ元簡、字ハ廉夫、通稱安長、桂山ハ其號ナリ、別ニ櫟窓ト號ス、其書齋ヲ聿修ト名ク。父ノ業ヲ承ケテ甚ダ醫學ヲ嗜ミ、專心力學精勵人ニ過グ。寛政二年侍醫トナリ、法眼ニ敍セラル、同十一年、父藍溪致仕セシヲ以テ其祿秩ヲ襲フテ侍醫兼督醫學事トナル。享和元年上旨ニ悖ヒ侍直ヲ罷ム、文化七年再ビ召サル、其年冬十二月二日俄ニ病ンデ歿ス、享年五十六。

著ス所ニ、素問識靈樞識、傷寒論輯義、金匱要略輯義、扁倉傳彙考、脈學輯要、醫賸、櫟窓類抄、挨穴輯要、觀聚方檜中鏡、素問解題、救急選方、聿修堂讀書記、痲疹三書、本朝經驗方、疵脚氣辨惑論、日光親程見聞記、文集アリ。



第八十　海上隨鷗

名ハ箭三伯ト稱ス、本姓ヲ稻村ト云フ、因州侯ノ醫員ナリ。嘗テ蘭學階梯ヲ見テ感奮志ヲ立テ、江戸ニ來リ、大槻磐水ノ門ニ入リ、能ク其學ノ蘊奥ヲ極ム。先生蘭學辭書ノ據ルモノナキヲ遺憾トシ、蘭人ハルマノ辭書ヲ譯シ、漸ク一部八萬語餘辭ヲ完飜シ、寛政八年始メテ活版トナシ、三十餘部ヲ社友ニ頒ツ、江戸ハルマト呼ブモノ之ナリ、後チ門人藤森晋山、同門ノ士小森桃塢ト謀リ刪補シテ三萬辭トナシ譯鍵ト題シテ世ニ行フ。先生故アリテ任ヲ致シ、下總海上郡ニ浪遊シ、名ヲ海上隨鷗ト更メ、後チ京都ニ來リ、大ニ蘭學ヲ唱道ス、ソノ名大ニ振ヒ從遊スルモノ數百人ニ及ブ。京都ニ蘭學アルハ實ニ先生ヨリ始マル。

宇田川榕齋、年壯ナルトキ放蕩不羈、素行修ラズ、既ニシテ窮困自活スルコト能ハズ、先生之ヲ憐ミ、蘭書ヲ傭譯シ以テ口ヲ餬セシム、ハルマ字解ノ著ハ榕齋ノ功多キニ在リトス。

文化八年正月十六日病デ歿ス。

第八十一　竹内新八

諱ハ持規通稱新八、高巖院ト呼ブ。信州諏訪ノ人、世々眼科ヲ以テ聞エ、江戸ノ土生玄碩、尾張馬嶋ノ明眼院、筑前惠美ノ田原養伯ト並ビ稱シテ眼科ノ四大家ト謂レタリ。文化八年三月四日ヲ以テ簀ヲ易ユ、享年七十六。

第八十二　山本封山

名ハ有香、字ハ蘭卿、一字中郎、封山ト號ス。越中高岡ノ人、寛保二年生マル、本姓日下氏、幼ニシテ業ヲ室鳩巣ノ門人ニ受ク、又曲直瀬道三ノ徒ニ從テ方伎ノ術ヲ學ビ、年冠ヲ踰ヘテ京都ニ來リ、吉益東洞ニ就キ學大ニ進ム。山本巨柳其才ヲ愛シテ嗣トナス、由テ山本氏ヲ冒ス。諸侯聘スレドモ出デズ。毎旦鷄鳴、乃チ起キ手カラ古書ヲ謄シ、飯後徒弟ヲ集メテ經ヲ講ズ、午後診療ニ從事ス、此ノ如キコト數十年一日ノ如シ。

文化十年三月七日病ヲ以テ家ニ歿ス、年七十三。

第八十二　山本涯山

第八十三　吉益南涯

諱ハ猷、字ハ修夫、謙齋ト號ス、幼名大助後周助ト稱ス、東洞ノ長子ナリ。疾醫ノ道ヲ父東洞ニ受ケ大ニ進ム、年二十四ノトキ、父東洞歿ス、乃チ箕裘ノ業ヲ嗣ギ二弟ヲ育テ諸生ヲ敎ユ、從遊ノ士多ク、門風大ニ振フ。年二十八ニシテ方機ヲ著シ仲景藥方ノ活用ヲ示ス。天明八年京都祝融ノ災ニ遇ヒ家產ヲ炎焦ス、乃チ移リテ大阪船場伏見街ニ僑居ス、時ニ年三十ナリ。市民ノ來リテ治ヲ乞フモノ日ニ數百人、其業大ニ行ハル。其居ル處ノ大阪ハ京都ノ南ニ位シ水涯ナルノ故ヲ以テ南涯ト號ス、年四十三ノトキ大阪ノ僑居ヲ弟辰ニ讓リ、自ラ京都ニ還リ三條東洞院西ニト居セリ。東洞ノ萬病一毒說ノ未ダ全カラザル所アリシヲ以テ、更ニ氣血水ノ三物アリ、毒之ニ乘ジテ初メテ證ヲナスノ說ヲ唱ヘ、仲景藥方ヲ說キ、氣血水藥徵ヲ著セリ。

先生ノ子弟ヲ敎フルヤ、鄭寧反復、諄々之ヲ示シ、懇諭倦ム色ナシ。門人ノ籍ニアルモノ凡ソ三千餘人、名ヲ成スモノ尠ラズ、賀屋恭安・中川修亭・大江廣彥・橫田元正・華岡青洲・華岡鹿城・山本永吉・武貞夫・和田元庵・賀川玄悅・難波抱節・赤石希範等ソノ選ナリ。

文化十年六月十三日病ヲ以テ其家ニ歿ス、享年六十四。

著ス所ニ傷寒論精義・輯光傷寒論醫範・氣血水藥徵・方機・方庸・方議辨・觀症辨疑アリ。

第八十四　村井椿壽

字ハ枹又大年、椿壽ト通稱シ、琴山ト號ス、又原診館・六清眞人・清福道人ノ別號アリ。早クヨリ父見朴ニ就キ方術ヲ學ブ、父ノ歿後再春館ノ助講ヲ命ゼラルレドモ辭シテ就カズ、京都ニ出テ吉益東洞ノ塾ニ遊ビ、留マルコト數旬ニシテ還ル、後又往テ教ヲ受ク。東洞其才ヲ偉トシ關西古方ノ任ヲ囑ス、歸ルニ及ビ傷寒論ヲ講ズ、醫名日ニ著ハル、專ラ師說ヲ繼述シ、著書甚ダ富ム、年五十餘ニシテ侍醫トナル、年八十二ニシテ致仕ス、

文化十二年三月一日病ンデ其家ニ歿ス、享年八十三。

著ス所ニ、續藥徵・醫道二千年眼目篇・方極刪定藥徵・剛定類聚方刪定・傷寒刪定・傷寒講義・扁鵲傳考・和方一萬方・方極腹診錄・類聚方講義・琴山劑記・扁鵲年表・診餘漫錄アリ。

第八十五　池田瑞仙

名ハ獨美、字ハ善卿、錦橋ト號ス。先生八歳ニシテ父ヲ喪ヒ、母ノ爲ニ育ハル、十二歳ノトキ岩國侍醫桑原玄仲ニ從テ大方及ビ啞科ヲ受ケ傍ラ外科ヲ學ビ、又阿蘭ノ方ヲ知レリ。自ラ謂ラク泛ク雜科ヲ學テ衆病ヲ療センヨリモ、寧ロ痘疹一術ニ留メ、家學ヲ百世ニ傳フルニ如カズト、茲ニ於テ戴氏ノ祕訣ヲ修メ大ニ發明スル所アリ。寶曆十二年安藝嚴島ニ移ル、時ニ年二十八、痘疾偶マ流行シ、家術ヲ施シ大ニ效アリ、十三年母死ス。安永六年、攝播二州ニ痘疫大ニ行レ、先生ヲ嚴島ヨリ迎フルモノアリ、乃チ浪華ニ寓ス、時ニ年四十。浪華ノ大醫齋藤幸庵、小松久吾節ヲ折テ門ニ入リ學ブ、先生其篤誠ニ感ジテ祕訣ヲ授ク。寛政四年、京都ニ遊ブ、時ニ年五十五ナリ。寛政九年十二月幕命ヲ蒙リ、翌年一月江戸ニ至ル、時ニ六十四、新ニ痘科ヲ建テ先生ヲ以テ之ニ當ラシメ、祿二百俵ヲ受ク、又痘書ヲ醫學館ニ講ズ、在官二十年、文化十三年九月歿ス、年八十三。

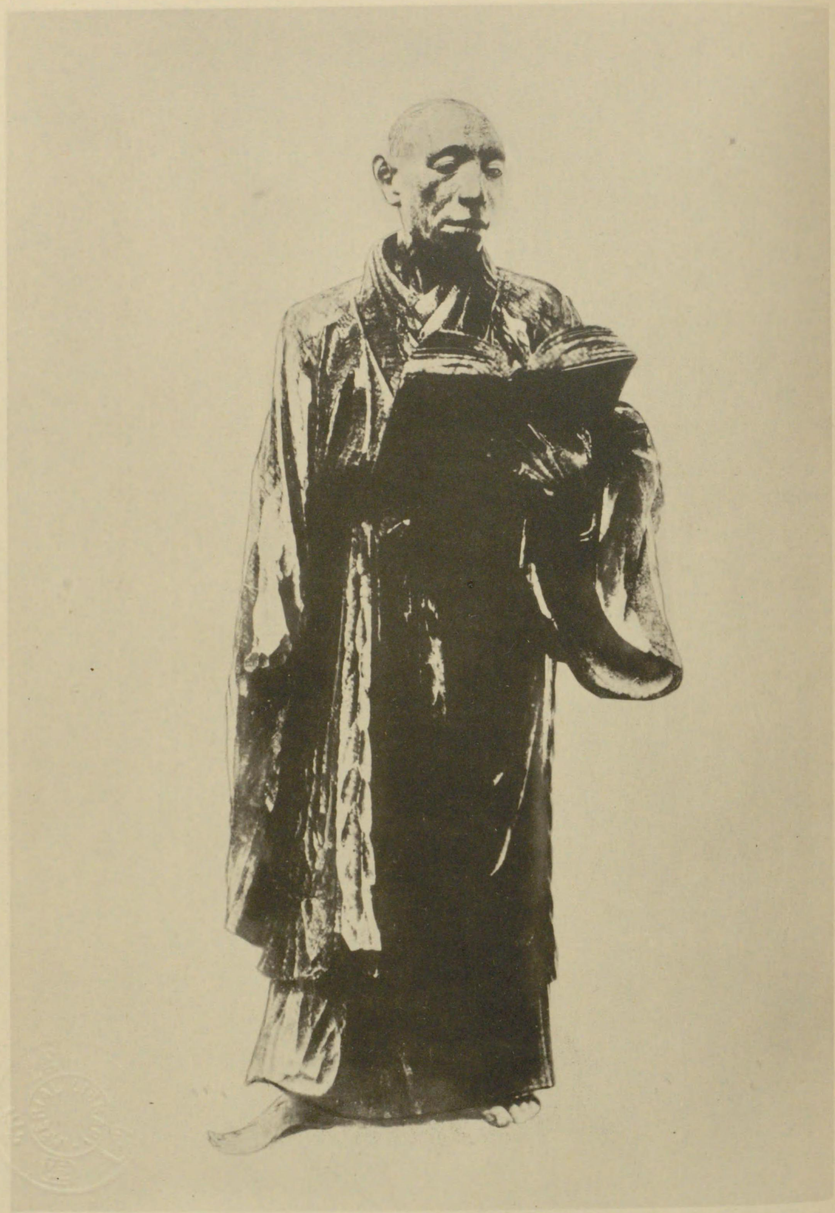
著ス所ニ痘科辯要、痘疹戒草、痘科鍵、刪正治驗錄アリ。

第八十六　杉田玄白

名ハ翼、字子鳳、九幸又ハ鵠齋ト號ス。若州ノ人、江戸ニ生マル、年十七八歳ノ頃西玄哲ニ就テ外科ヲ學ビ、又宮瀧龍門ニ從テ經史ヲ學ブ。年三十七、蘭學創始ノ業アリ、前野蘭化ト共ニ蘭醫バブル及ビ通詞西吉雄ニ親炙シ益々和蘭醫學ヲ修ム。明和八年三月四日一婦人ノ屍ヲ千住驛外小塚原ニ解キ、續イテ、同志ト共ニクルムスノ解剖圖譜ヲ飜譯セントシ、年ヲ經ルコト四年、稿ヲ易ユルコト十回、安永三年秋八月ニ至リテ解體新書ヲ刊行セリ。

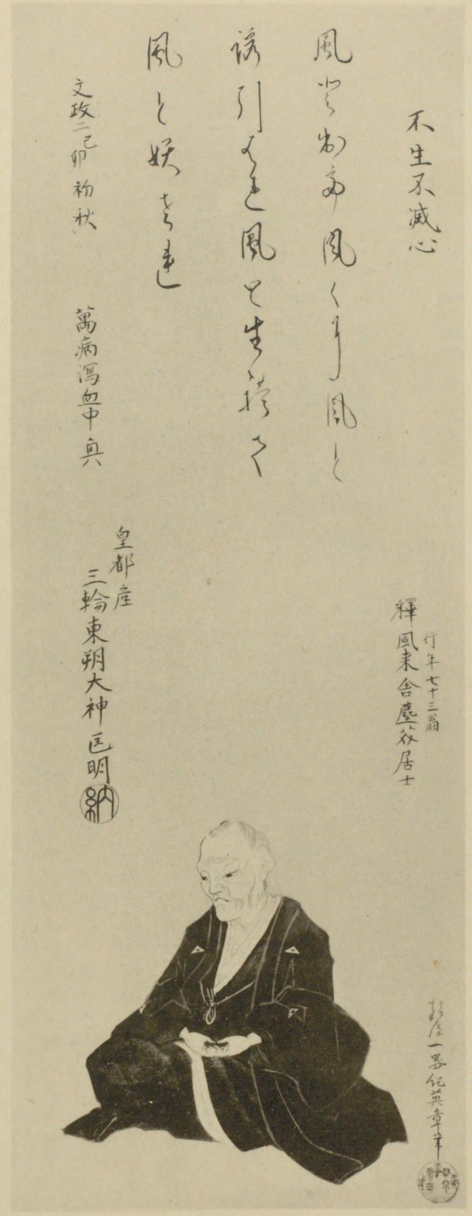
文化十四年四月十七日歿ス、享年八十五。

著ス所ニ、瘍家大成、蘭學事始、形影夜話、狂醫之辨、野叟獨語アリ。



第八十七　杉田玄白（木像）

史傳前ニ出ヅ。



第八十八　三輪東朔

名ハ東朔字ハ望郷、淺草庵ト號ス。山城ノ人、醫ヲ志シ、諸邦ヲ遊歴ス、北總銚子ニ足ヲ停メ、廢人ヲ治セリ。後江戸ニ移リ門戸ヲ張リ業大ニ行ル。

嫡男大神能明ガ文政二年ニ圖像ニ書シタル所ニヨレバ、大神醫明ハ大和國三輪大明神之社務高宮主水ノ一族、山城國宇治郡南山科勸修寺住人ニテ、勸修寺宮觀寶法親王ニ仕奉シタル植田佐渡法橋ノ嫡男三輪彈ト云フ人ナリ。齢八十ヲ越ユ、著ス所ニ刺絡聞見錄アリ。

第八十九　原南陽

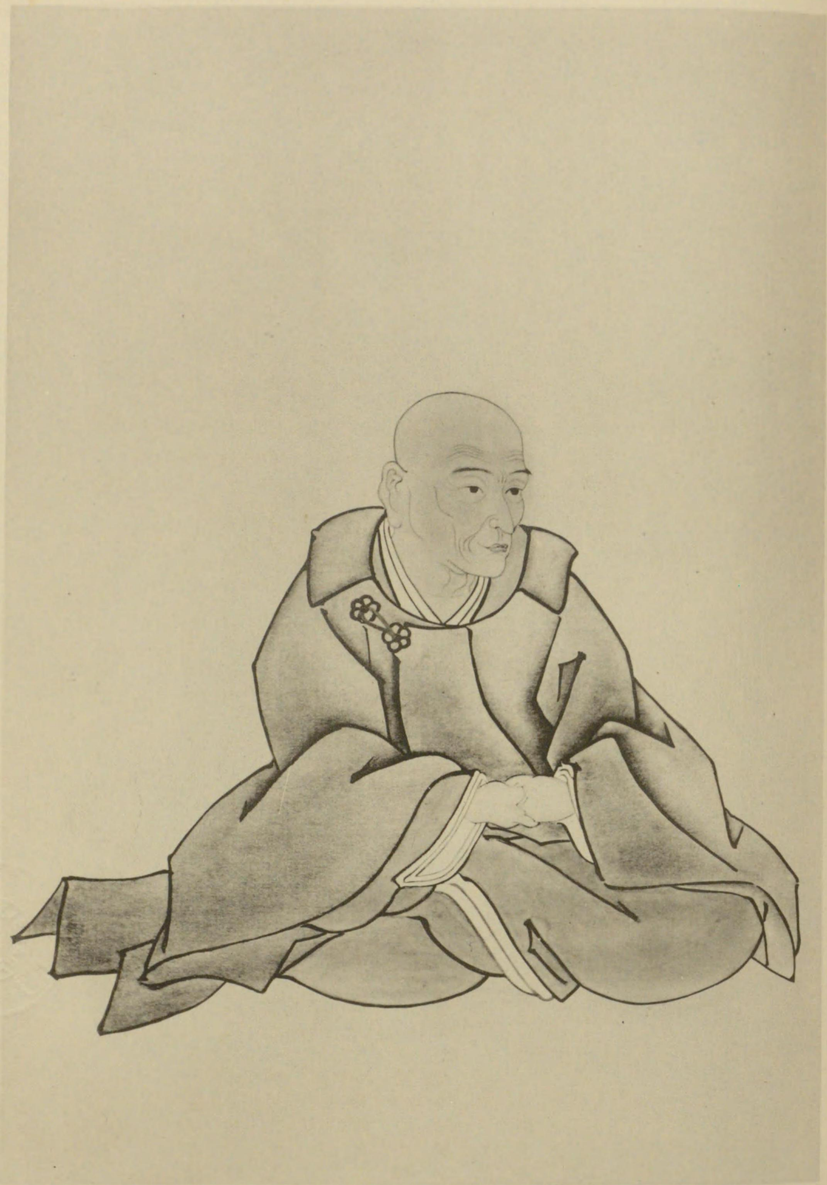
名ハ昌克、字ハ子柔、通稱玄璵、南陽ト號ス。先生年壯ニシテ京都ニ遊ビ、山脇東門ニ醫方ヲ受ケ、又産術ヲ賀川氏ニ修ム。後チ江戸小石川ニ僑居ス、業未ダ行レズ、窮乏ノ餘、按摩針治ヲ以テ生業トス。先生性酒ヲ嗜ムコト甚シ。時ニ水戸侯暑ニ中タリ暴ニ病ム、侍醫擧ゲテ診療スルモ效ナシ、侍臣某、先生ヲ薦ム、先生診シテ侯ノ病愈ユ、遂ニ拔擢シテ侍醫トナシ、五百石ヲ賜フ。先生ノ醫經ヲ治ムルヤ、章句ヲ事トセズ、專ラ適用ヲ主トセリ、先生侍醫ノ職ニ在ルコト三十餘年、文政三年八月十六日病デ歿ス、享年六十八。

先生、其先昌俊甲斐ノ名稱タルヲ以テ、其後ヲ承ケ方伎ニ食スルヲ耻ヅ、其子昌綏祿ヲ襲フニ及ビ、侯命ジテ改メテ諸士ノ班ニ就カシメ以テ其志ヲ成ス、昌綏進ンデ軍師ト成ル。

著ス所ニ、醫事小言、經穴彙解、叢桂偶記、瘈狗傷考、傷寒夜話、痘瘡策、脚氣編、叢記、藥語、西遊雜記、解毒奇功方、寄々方記、砦草アリ。

第九十　本木蘭汀

名ハ正榮、字ハ子光、蘭汀ト號シ、又聯芳軒ノ別號アリ、庄左衞門ト呼ブ、仁太夫良永ノ子ニシテ、明和七年ニ生マル。安永七年稽古通詞、寛政五年小通詞並トナリ、翌五年同助役トナリ、文化二年大通詞ニ進ミ、同五年ヅーフト共ニ江戸ニ來リ、天文臺ニ出仕シ、十二月歸崎ス。同六年露語英語ノ修學ヲ命ゼラル。文政五年三月十五日歿ス、享年五十六。



第九十一　片倉鶴陵

字ハ深甫、元周ト通稱ス、相州榮井縣ノ人ナリ、世々醫ヲ以テ業トス。年十二江戸ニ來リ、多紀玉池及ビ多紀藍溪ニ學ビ、ソノ子廉夫ト共ニ文ヲ井上金峨ニ學ブ。年二十五居ヲ白金街ニトシ業ヲ開ク、治ヲ請フモノ頗ル多ク、家事頗ル饒ナリ。天明八年火災ニ罹リ家產蕩盡ス、發憤シテ京都ニ遊ビ、產科ヲ賀川氏ニ學ビ、其蘊奥ヲ窺フ。東歸ノ後、其術ヲ精究シ以テ後生ヲ誘拔ス、生徒ノ業ヲ受クルモノ、病者ノ治ヲ請フモノ共ニ戸外ニ盈ツ。後庭姙婦アルニ當リ鶴陵ヲ召シテ按腹セシメ、期ニ及ビテ達生ス、乃チ白銀若干ヲ賜ハル。鶴陵年六十ニ近キトキ發脊未ダ潰セザルニ、相樸門人某ノ病ヲ聞キ强行ス、家人之ヲ諫ムレドモ聞カズ、之ヲ治シテ歸ル。會津少將ノ疾ムヤ、之ヲ治シテ浹旬ニシテ痊ユ、後少將又國ニ在リテ疾ム、來治ヲ乞フ、時正ニ嚴冬ニ屬シ、冱寒積雪殆ンド堪ユベカラズ、鶴陵病已ニ篤キモ、然モ猶能ク命ニ應ズ、門人舊故皆之ヲ危マザルハナシ、恰然トシテ行ク。ソノ會津ニアルヤ、寵遇優渥皆異數ニ出ヅ、人皆之ヲ艶羨セリト。文政五年九月十一日病デ、其家ニ歿ス、年七十二。

著ス所ニ、產科發蒙・癥癘新書・傷寒啓微アリ。

第九十二　片倉鶴陵（木像）

史傳前ニ出ヅ。

第九十三　大槻玄澤

名ハ茂質、字ハ子煥、陸奥ノ人、家世々磐井川上ニ居ルヲ以テ自ラ磐水ト號ス。先生年十三、一ノ關藩建部清菴ニ從テ醫ヲ學ブ、後杉田玄白ノ門ニ入ル、又長崎ニ遊ビ蘭學ヲ修ム。時ニ前野良澤ノ名一時ニ譟シ、玄澤亦從テ業ヲ受ケ、大ニ此學ヲ闢ク。著ス所ノ蘭學楷梯出ルニ及ビテ、世ノ蟹行文ニ志ス者之ヲ宗トセザルハナシ。天明六年仙臺侯聘シテ侍醫トナス、文化八年幕府命ジテ蘭書ヲ飜譯セシム、歲每ニ銀二十錠ヲ受ク、九年侯又祿ヲ加ヘテ三百石トナス。文政五年幕府又其譯述ノ勤勞ヲ錄シテ俸五口ヲ與フ。文政十年三月晦日、疾ヲ以テ歿ス、享年七十一。

著ス所ニ、蘭學楷梯、重訂解體新書、瘍醫新書、蘭畹摘芳、六物新志、薦錄、環海異聞アリ。

第九十四　多紀柳沽

名ハ元胤、通稱安元、幼名ハ彌生之助、又安良、又安長、字ハ紹翁、柳沽ハ其號ナリ。桂山多紀元簡ノ第三子ニシテ、多紀氏第八世トナレリ。文化二年十二月二十二日初メテ將軍文恭公ニ謁ス、八年正月父元簡遽ニ病ミテ歿セシヨリ、三月ソノ職ヲ嗣ギテ醫學督事トナリ、醫學會ノ事務ヲ總裁シ、外班ニ列シ、俸三十人口ヲ賜フ。文政五年十二月十六日法眼ニ敘セラレ、六年八月法親王ニ隨從シテ日光ニ詣ル、同十年六月三日病デ歿ス、年僅三十九、平塚城官寺先塋ノ次ニ葬ムル、長子元昕後ヲ承ク、曉湖先生之レナリ。先生學問該博、著述等身ニ及ブ、家人ノ生業ヲ以テ意トナサズ、雨フレバ傘シテ机ニ憑レリト云フ。

著ス所ニ、八十一難經疏證、體雅藥雅、疾雅名醫公案、醫籍考、柳沽文集アリ。醫籍考ハ朱錫鬯ノ經義ニ倣ヒ、先ヅ書名ヲ擧ゲ、次グニ卷數、著作、刊行ノ年代、及ビ其存佚ヲ以テシ、次グニ諸家ノ序跋及ビ例目錄ヲ以テシテ其書ノ由來及ビ書中ノ內容ヲ詳細セリ。全部百卷未ダ梓ニ上ラザルヲ以テ世間ニ傳ハルモノ少シト雖甚ダ吾人ニ有益ナリ。

第九十五　華岡鹿城

名ハ文獻、字ハ子徵、鹿城ト號ス、青洲ノ弟ナリ。兄ト共ニ吉益氏ノ門ニ在リ、後チ大阪ニ居リ盛名アリ。華岡氏紀州大阪ノ二家アリ、並ニ醫ヲ以テ樹立ス。

第九十六　川越衡山

諱ハ正淑、字ハ君明、一字ハ大亮、衡山ト號ス、京都ノ人。中西深齋ノ門ニ入リ、更ニ師說ヲ敷衍修飾シテ一新面ヲ開キタリ。文化六年十二月典藥寮醫師ニ補セラレ、文政六年正月從五位下佐渡守ニ至ル、文政九年冬中風ヲ患フ、同十一年秋舊疾再發、同八月九日家ニ卒ス、年七十一、鳥部山實報寺ニ葬ル。

著ス所ニ、傷寒脈證式、傷寒藥品體用、傷寒奥旨、古方拔萃晩方拔萃傷寒論正文、金匱要略正文アリ。

第九十七　伊澤信恬

字ハ澹甫、通稱辭安、蘭軒ト號ス、其他蕤齋都梁笑仙邈姑射山人ノ數號アリ。堂ヲ酌源堂、又三養堂ト號ス、福山ノ人ナリ。文化ノ初年、柳原主計頭ノ長崎奉行ニ隨行シテ期年長崎ニ遊ビ、程赤城、胡兆新ト風交ス。醫ハ目黑道琢、本草ハ赤荻由儀、大田長元ニ學ビ、又多紀桂山ニ應酬ス、儒學ハ泉豐洲ニ學ブ。長崎ヨリ歸リテ福山侯ノ侍醫トナル、後足痛ヲ患ヒ、遂ニ痿躄ヲナス、因テ直醫ノ列ニ加ハリ儒官ヲ兼ヌ、編選序跋等ノ作文ニ至リテハ君侯每ニ刪正ヲ命ズ。病用ノ節ハ痿躄ノママニテ君前ニ出ヅ。信恬短視ニシテ且ツ褌ヲ嫌ヒ帶ビザルノ癖アリ、或時君前ニテ糞垂ヲ現ス。依テ自ラ被ル所ノ膝掛ヲ賜リシコトアリ、出格ノ扱ナリ。文政十二年三月十七日歿ス、年五十三。

第九十八　各務文獻

字ハ子徵、通稱相二、大阪ノ人。先生嘗テ慨シテ曰ク古ニ未ダ有ラズシテ、今亦未ダ行レザルモノハ整骨科ナリト、思ヲ該術ニ覃シ、研鑽數年、大ニ得ル所アリ、斯科ノ泰斗ヲ以テ稱セラル。先生以爲ラク、骨節ノ理ヲ發明スルニ在ラズンバ、此術ノ祕訣ヲ得ベカラズト、乃チ自カラ刑屍ニ就テ、剖キテ視ルコト數十回、以テ其運轉機能ノ理ヲ推究シ、更ニ或ハ器械ヲ製シテ治方ニ便シ、或ハ繃帶ヲ裁シテ搖動ヲ護ル、何レモ皆創意ニ出テ、古來治シ難シトセシモノ治セズト云フコトナキニ至レリ。文政十二年十月十四日病ンデ歿ス、年六十五。

先生整骨ノ術ヲ授クルニハ眞骨ニ就テ深ク按撫スルニ非ラザレバ則チ得テ知ルベカラザルモノアリ、然レドモ眞骨ヲ求ムルコトノ難キヲ以テ、良匠ニ命ジ木ヲ以テ全骨ヲ造ラシメ、之ヲ坐側ニ置キテ諸生ヲ教授セリ。幕府醫官石坂竿齋、之ヲ見テ工妙眞ニ逼マレリト歎稱シ、骨經ト題スル一書ヲ著セリ。

先生整骨新書ヲ著シ、文化七年五月ニ成リ、其年十二月刊行ス、發明ノ論說治術皆此中ニ在リ。別ニ各骨眞形圖一卷ヲ附ス凡ソ三十三圖皆骨骸ノ眞景ヲ寫セリ。婦人內景圖一卷アリ。

第九十九　畑柳泰

名ハ維禎、字ハ世吉、橘洲ト號ス。本姓ハ上林、宇治ノ人、年十三自ラ奮テ曰ク男子名ヲ成サント欲セバ、何ゾ僻郷ニ蟄居スベケンヤト、江戸ニ出デテ儒學ヲ修ムルコト數年、已ニシテ以爲ラク、栖々覊旅久シク溫情ヲ奉ゼズ、京都ハ父母ノ居ニ近シ、是レ吾ガ身ヲ投ズルノ地ナリト、遂ニ意ヲ決シテ京都ニ歸住ス。時ニ京都、人文濟々互ニ雄視ス、柳泰猶少壯ニシテ其間ニ馳驅シ、諸子ノ推重スル所トナレリ。時ニ醫學院畑黄山醫學精妙ヲ以テ尙藥奉御トナル、子ナシ柳泰ノ人トナリヲ愛シ養テ嗣トス、時ニ年二十一、享和三年八月十日法橋ニ敍シ、文政十年十月二十九日法眼ニ進ム、天保三年三月十日歿ス、年六十二。

著ス所ニ、素問槎識、傷寒論詮註、心醫方考、方餽アリ。

第百　中神琴溪

名ハ孚、通稱右内、字ハ以隣、琴溪又ハ生々堂ト號ス。近江ノ人、出デテ大津醫家中神家ヲ嗣グ、居常貧困ナリ、年三十餘ニシテ發憤、醫ヲ以テ名ヲ立テントス、偶々古方便覽ヲ獲、大意ヲ得。後チ京都ニ移住ス、時ニ寛政三年、先生年四十九、堺町通四條南入ニト居シ、門戸ヲ張リ、古方家ノ說ヲ奉ズルモ繩墨ヲ守ラザリキ。後江戸ニ遊ビ、又諸國ヲ遊歷シ、遂ニ近江ノ田上ニ隱ル。更ニ故里山田ニ歸リ、天保四年八月四日病ンデ歿ス、年九十一。著ス所ニ、生々堂醫談、生々堂傷寒約言、生々堂養生論、生々堂治驗、生々堂襍記アリ。

第百一　賀川蘭齋

名ハ滿定、字ハ子清、蘭齋ト號ス、有齋ノ次男ナリ。安永元年十一月生マル、父ノ術ヲ傳ヘテ其名大ニ彰ハル。文化十二年十一月典藥寮醫員ニ擢デラレ正七位下ニ敍シ、武藏大椽ニ任セラル、翌年二月女醫博士ニ補セラレ攝津介ニ遷任シ、從六位下ニ敍セラレ、後累進シテ正六位下ニ至ル。蓋シ女醫博士ノ官闕ルコト久シ、是ニ至リテ之ヲ復セルナリ。天保四年十月十九日病デ歿ス、享年六十三。探領器ヲ發明ス。

第百二　宇田川榛齋

舊姓安岡、名ハ璘、字ハ玄眞、榛齋ハ其號ナリ。伊勢ノ人、明和六年十二月廿八日生ル、後チ江戸ニ出デテ津山藩醫宇田川玄隨ノ門ニ入リ、後チ大槻玄澤ニ就テ蘭醫方ヲ學ブ、又嘗テ嶺春泰ノ家ニ寓シ、次デ桂川甫周ノ家ニ移ル、杉田玄白先生ヲ養フテ子トナシ、女ヲ以テ之ニ配ス、後故アリテ去ル。之レヨリ、困阨太甚ナリ、玄白ノ子伯元、稻村三伯等憐テ之ヲ庇シ傭フテ蘭書ヲ譯セシム。寛政九年宇田川玄隨歿シテ嗣ナシ、乃チ親故集リ議シテ先生ヲシテ其後ヲ承ケシメ、宇田川氏ヲ冒ス。先生ノ門ニ來リ學ブモノ常ニ數百人、名ヲナセルモノ甚ダ多シ、坪井信道、藤井方亭、箕作阮甫、青木周弼、戸塚靜海等世ニ鳴レリ。

稻村三伯、嘗テ蘭學辭書ノ後進ニ便ズベキモノナキヲ憂ヒ、ハルマノ辭書ヲ譯セントス、先生乃チ岡田甫說ト力ヲ戮セテ三伯ヲ助ケ、拮据數年ニシテ書成ル、世ニ所謂江戸ハルマ之レナリ。

天保五年十二月四日病デ歿ス、享年六十六。弘道院普濟潤生ト謚ス。

著ス所ニ、遠西醫範、醫範提綱、和蘭藥鏡、遠西名物考アリ。

第百三　山脇東海

名ハ之豹、字ハ子辨、東海ト號ス、後チ玄冲ト改ム、山脇第五世道作ナリ。寶曆七年九月二十二日ニ生マル、寛政三年三月十一日法眼ニ敍セラル。數度解剖ヲ行ヘリ。天保五年四月一日夜俄ニ卒中シ、同三日卒ス、享年七十八歳。

第百四　奥劣齋

名ハ之基、字ハ子讓、劣齋ト號ス。醫ヲ山脇東門ニ學ビ、産術ヲ賀川子玄ニ受ケ、遂ニ家ヲ興ス。先生世ノ横産ヲ理ムルモノノ鈎ヲ用ヒ生ヲ傷ツクルヲ痛ム、深慮詳思、別ニ一法ヲ創作シ、名ケテ雙全術ト云ヒ、母子ノ横夭ヲ救ヘリ。文政甲申法橋ニ敍ス、己丑ノ歳、准三后、産后尿閉、先生「カテーテル」ヲ用ヒテ效ヲ奏シ法眼ニ進ム。安永九年五月二十八日ヲ以テ生マレ、天保六年九月四日疾ヲ以テ歿ス。

著ス所ニ、産論校註、女科隨劄、達生園、産科外科祕錄、産科内術、産科圖記、同生鈎胞祕訣アリ。又校スル所ニ婦人大全良方、保産心法アリ。

第百五　華岡青洲

名ハ震、字ハ伯行、通稱隨賢、青洲ト號ス。紀州加賀郡西野山村ノ人、出デテ京都ニ遊ビ、吉益南涯ニ從ヒ、又大和見水ニ就キテ外治ヲ修メ、其他諸家ノ說ヲ參酌シテ常師ナシ、刻苦碎礪スルコト數年、去テ紀伊ニ歸リ、內外合一活物窮理ノ說ヲ唱ヘ、古今漢醫ヲ折衷シテ活用シ、外治術ニ大手腕ヲ揮フ、醫生來リ敎ヲ請フモノ千百三十餘人ナリ。文政二年、紀州侯ニ辟サレテ其醫員トナリ、後侍醫ニ準ジ、其邑ニ居ルコトヲ許サル、蓋シ破例ノ特典ナリ天保六年十月二日病デ家ニ歿ス、年七十六。

青洲大手術ヲ施スノ前ニ一種ノ痲醉劑ヲ發明シ、痲沸湯ト稱セリ。リストンガ依的兒痲醉ヲ用シニ比セバ三十六年前ノコトナリ。

著ス所ニ、瘍科瑣言、瘍科神書、疔瘡辨明、乳癌辨、天刑祕錄、傷寒講義、青洲醫談、瘍科方筌、膏方便覽、丸散方、青囊祕錄等アリ。

第百六　華岡青洲（還暦賀像）

史傳前ニ出ヅ。

第百七　橋本宗吉

宗吉ハ初名直政後ニ鄙ト改ム、字ハ伯敏、伯軒ト號ス。大阪ノ人、北堀江ニ住ム、小石元俊、間五郎兵衞ノ援助ニヨリ家資學費共ニ辦ゼラレ、東遊シテ大槻磐水ノ門ニ學ブ、實ニ寛政二年ニシテ、宗吉時ニ年二十八ナリ、斯年ナラズシテ學大ニ進ミテ大阪ニ還ル。同七年宗吉始メテ醫業ヲ車坂ニ開キ、且ツ蘭語ヲ教授ス、大阪ニテ蘭學ヲ教授セシハ宗吉ヲ以テ嚆矢トス。明年喝蘭新譯地球全圖ヲ刊行ス、享和二年ウヲムデルハンリース藥劑書ヲ譯シテ蘭科内外三法方典ヲ著シ、文化ノ初遂ニ全部六卷ヲ上梓セリ。

文政十二年豐田貢ノ巫女ガ妖術ヲ行フ、人呼ンデ切支丹婆ト云フ、大坂町與力大鹽平八郎捕ヘテ死刑ニ處ス、宗吉モ與黨ナリトノ嫌疑ヲ受ケ獄ニ下サル、後免レテ舊業ヲ執ル、天保七年五月一日歿ス、年七十四。

著ス所ニ、西洋醫事集成寶函二十四卷、華蠻通志二卷、遠西雜俎三卷、西洋產育全書十卷、解體書七卷、ショメル奇才四卷、内景洞視二卷アリ。

第百八　竹中南峰

諱ハ溫、字ハ子良、通稱文卿、後文輔ト改ム、南峰ハ其號ナリ。紀州田邊ノ人、明和三年十二月十二日ニ生マル、弱冠ニシテ京都ニ出デ和田東郭ノ門ニ入リ術ヲ修ム、又治痘ノ術ヲ池田錦橋ニ受ク。天保七年七月八日歿ス、年七十一。其墓ハ京都鳥邊山延年寺ニアリ。

第百九　最上德内

名ハ常矩、字ハ子員、甑山又ハ白虹齋ト號シ、德内ト通稱ス。出羽最上ノ人、寶暦四年ニ生マル、家業農ヲ營ム、年十四、武士ヲ以テ立身セント志セリ、年二十六江戸ニ出テ幕府醫官山田立良ノ僕トナリ、傍ラ醫業ヲ學ビ、本田利明ノ塾ニ入リ天文曆算ヲ學ブ。天明四年利明ニ代リ蝦夷視察使ノ一行ニ隨フ、先生夙ニ蝦夷開拓ノ志アリキ、具サニ蝦夷ノ地理風俗ヲ究メ自ラ各地ヲ踏調セリ。

天保七年九月五日歿ス、享年八十三。本郷駒込蓬來町蓮光寺ニ葬ル。

著ス所ニ、度量衡說、論語彛訓、蝦夷草紙、同後編、蝦夷島言葉、孝經古今文異同考、赤人問答、八線眞數表、八線對數表、調劑祕書、松前史略、大測表解アリ。

第百十　江馬蘭齋

名ハ春琢字ハ元恭、通稱春齡、蘭齋ト號ス。本姓鷲見、美濃大垣ノ人、幼ニシテ大垣醫官江馬元澄ニ養ハル、由テ江馬氏ヲ冒ス。前野・杉田ノ江戸ニ和蘭醫學ヲ唱フルヲ聞キ、憤然トシテ蹶起シ、江戸ニ赴キ蘭化ノ門ニ入ル時ニ年四十七、居ルコト年餘、歸鄉シテ業ヲ開ク。謗訕相告ゲテ曰ク亂暴醫術ヲ以テ疾病ヲ醫スト、蓋シ亂暴蘭方ト國音相近シ、故ニ之ニ託シテ彼ヲ罵レリ。一人ノ治ヲ乞フモノナシ、偶々京都西本願寺法主疾篤シ、先生ヲ召ス、先生診シテ尙治スベシト、卽チ藥ヲ進メテ治驗アリ、先生ノ名大ニ天下ニ顯ル。天保九年病デ歿ス、年九十二。

著ス所ニ、五液診法、泰西熱病集譯、水腫全書アリ。先生嘗テ蒸氣浴ヲ造リ黴毒病者ヲ療セリ、遺法今尙遺リ、大垣ニ行フモノアリ。

第百十一　百々漢陰

諱ハ俊德、字ハ克明、通稱内藏太、確齋ト號ス。京都ノ人、安永三年京都ニ生マル、少シテ醫學ヲ父ヨリ受ケ、傍ラ皆川淇園ノ門ニ遊ブ。年二十九、父ノ命ニ從ヒ、別ニ一家ヲナシテ刀圭ノ業ヲ修ム、業大ニ行ハル。天保十年四月十三日病デ歿ス、享年六十六。洛西祐正敎寺ニ葬ル。

著ス所ニ、醫粹類纂、本草綱目類抄、奇效方、未病藥編、醫粹約範、校定溫疫論、瘟疫論翼訣、漢陰臆乘、田間方叢、醫案學步、確齋暇筆、醫粹方函、漢陰存稿アリ。

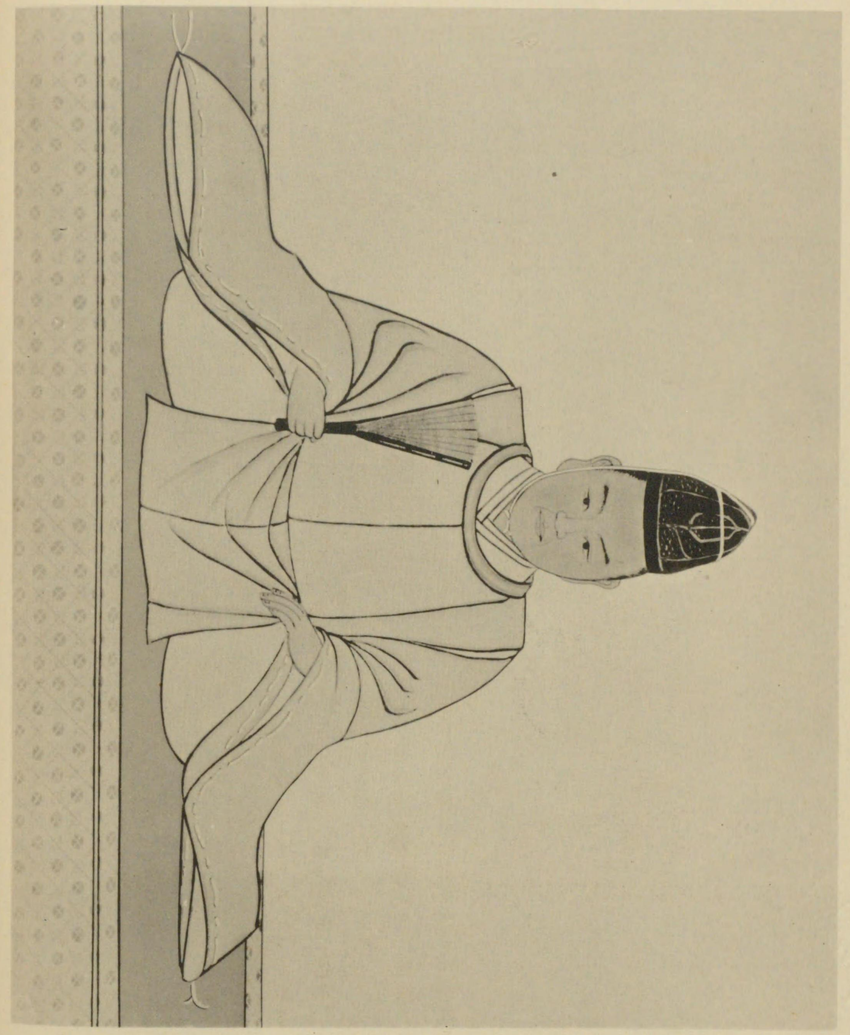
第百十二　山脇東圃

字ハ子達、名ハ玄致、家督後道作ト改ム。天明元年ニ生マル、天保十三年歿ス享年六十二。

第百十三　岩崎灌園

名ハ常正、一ニ萬、字ハ士方、通稱源藏、灌園ト號ス、一ニ玄堂ト別號ス。江戸ノ人、天明六年六月二十六日下谷三枚橋ニ生マル、小野蘭山ノ門ニ入リ最モ植物ニ通ジ、自ラ後園ヲ拓キテ多クノ草木ヲ栽培澆灌シ、積年工夫練熟シ其發明スル所多シ。天明十三年一月二十九日歿ス、享年五十七。

著ス所ニ、本草圖譜・本草穿要・救荒圖譜・綱救外論・本草綱目通解・救荒野譜通解・梅花寫生・草木育種アリ。



第百十四　小森桃塢

名ハ初メ吉啓義啓、後チ任ト改ム、桃塢、又鶏齋ト號ス。美濃外淵ノ人、天明二年四月三日生マル、本姓大橋氏、伏見ニ開業スル小森吉晴ニ乞ハレテ寛政三年九月其養子トナル。夙ニ醫學及ビ内外學ニ通ジ、蘭學ニ熟ス。寛政十一年江馬春齡ニ接見シ西洋醫學ノ精微ヲ知リ、海上隨鷗ニ從ヒ蘭方ヲ學ビ、後チ長崎ニ遊學シテ益々獲ル所アリ。文化十一年京都ニ還リ、藤林晋山ト交リ相共ニ協心戮力シテ斯道ヲ起サント約セリ。文政三年二月召サレテ侍醫トナリ、從六位下肥後介ニ任官シ、同十一年維殿助ニ進ミ、續テ正六位下ニ敍セラル。天保十四年三月二十三日病歿ス、享年六十二。喪發セズ、五月十二日從五位下信濃守ニ敍セラル。京都禪林寺ニ葬ル。

著ス所ニ、蘭方樞機、病因精義、泰西方鑑、病診要訣アリ。

第百十五　平田篤胤

通稱大角又大壑ト云フ、氣吹廼舍ト號ス。安永五年八月羽後久保田ニ生マル、本姓大和田氏、幼ニシテ經書ヲ中山菁莪ニ學ブ、又醫ヲ叔父大和田祚胤ニ修ム。年二十始メテ江戸ニ出デテ學事ニ親シム、偶々備中松山藩士平田篤穩ニ知ラレ、請ハレテ其嗣トナル。文化元年惟ヲ垂レ、徒弟ヲ訓ヘ、天保元年佐竹侯ニ仕フ。天保十四年九月十一日病歿ス、享年六十八。

第百十六　宇田川榕菴

諱ハ榕、榕庵ト號ス。大垣ノ醫江澤養樹ノ長子ナリ、出デテ宇田川榛齋ノ義子トナリ姓ヲ嗣グ。君少クシテ物産學ヲ好ミ、長ズルニ及ビ馬場轂里ニ就テ洋學ヲ受ク、和蘭人入貢スル毎ニ、其客館ヲ訪ネ得ル所多シ。文政九年幕府ノ命ニヨリテ蘭書ヲ飜譯ス。天保四年植物啓原ヲ著ス、同七年月俸五口ヲ受ク、同十年舍密開宗ノ刻成ル、弘化三年六月二十二日鍛治橋邸ニ於テ歿ス、年四十九。配足立氏、筱山醫員足立長雋ノ娘ナリ、子ナシ、大垣飯沼氏第三子興齊ヲ養フテ嗣トス。

第百十七　高良齋

名ハ淡、字ハ子潰、良齋ト號ス。本姓山崎氏、寛政十一年五月十九日阿波德島ニ生マル、高錦國ニ養ハレテ子トナル。年十三錦國ニ侍シテ眼科ヲ學ビ、乾純水ニ本草學ヲ受ク、年十九父ニ請フテ長崎ニ至ル、時ニ文化十四年十月ナリ。シーボルトニ從ヒ學ブコト八年、刻苦研鑽ス、文政十一年シーボルトノ寃獄起リ、先生モ亦連坐獄ニ下ル、後許サレテ天保二年德島ニ歸リ、更ニ大阪ニ移ル、天保十一年明石侯ノ醫員ニ擧ゲラル。

弘化三年九月十三日疾暴ヲ發シテ瞑ス。享年四十八。

譯スル所ニ、西醫新書、內科捷徑、外科精義、銀海祕錄、藥品撮要、飲食要訣、醫則、女科精選、眼科便用、藥能識、蘭藥語用辨、驅梅要法アリ。

第百十八　小川汝庵

名ハ忠實、字ハ意公、通稱文菴、後避クル所アリテ汝庵ニ改ム、竹塢ハ別號ナリ。世々幕府醫官ニ列リ法眼ニ敍セラル。汝庵年七歳ニシテ父母ヲ失フ、伯母圓覺愛撫シテ哺育ス。年十六讀傷寒論十卷ヲ著シ、又老子ヲ注ス、文化二年擢セラレテ侍醫トナリ、醫學助教ヲ兼ヌ、同七年西城侍醫ニ轉ジ法眼トナリ、醫學教諭ヲ兼ネ、天保九年法印ニ敍シ、龍仙院ト號ス。

文化元年、蘇州ノ醫胡兆新長崎ニ來ル、先生卽チ千賀柳外、吉田菊潭ト共ニ、命ヲ奉ジテ長崎ニ赴キ、胡兆新ト醫ヲ談ズ、弘化二年傷寒貫珠集ヲ醫校ニ納ム、本邦ニ尤氏傷寒ノ書アルハ是ヲ以テ始トナス。

弘化二年秋上書骸骨ヲ乞フ幕府厚ク禮ス。四年四月六日ヲ以テ終ル、享年六十六。男鳳出デテ岡氏ヲ冒ス。

第百十九　岡節齋

名ハ庚、節齋ト號シ、良節ト稱ス。明和元年十二月朔日江戸ニ生マル、本姓北川氏、岡道生ニ養レテ嗣トナル。醫ヲ山田圖南ニ學ビ、書ヲ山本北山ニ習フ。天明九年法眼ニ敍セラレ、奉職五十一年法印ニ進ミ、櫟仙院ト號ス。弘化二五年二月二日曳然トシテ逝ク、時年八十五。

第百二十　宇津木昆臺

名ハ益夫、字ハ天敬、俗稱太一郎、昆臺ハ其號ナリ。尾張ノ人、醫ヲ淺井貞庵平野龍門ニ學ビ、十八歳ノトキ笈ヲ負ヒテ京都ニ出デ諸大家ノ門ニ出入シ、益スル所甚多シ。古醫方ヲ以テ一世ニ鳴ル。嘉永元年五月八日家ニ歿ス、年七十。

著ス所ニ、古訓醫傳・日本醫譜・解莊詩文集・和歌集アリ。

第百二十一　宇津木昆臺（木像）

史傳前ニ出ヅ。

第百二十二　小石元瑞

名ハ龍、樫園ト號ス、小石元俊ノ子ナリ。年十六父ニ從ヒ江戸ニ出デテ和蘭醫方ヲ、杉田・宇田川・大槻ノ諸家ニ學ブ。後チ西歸シテ箕裘ノ業ヲ嗣ギ、術業大ニ行ハル。年五十家事ヲ兒紹ニ附シ、別居シ著書自ラ娛ミ其居ニ題シテ用拙居ト云ヒ、自ラ拙翁ト稱ス。年六十四ノ冬中風ニ罹リ、嘉永二年二月十日歿ス、享年六十六。著ス所ニ、究理堂方府、究理堂講義、博采錄、藥性摘要、蘭藥分量考、東西醫說折義、梅毒祕說、樫園隨筆、詩文集アリ。

第百二十三　齋藤方策

名ハ淳、又順、字ハ素行、通稱方策ト呼ブ、九和・半山・孤松軒ノ號アリ。周防一本松ノ人、明和八年ニ生マル、長ジテ醫學ヲ學ビ、年十九大阪ニ出デテ小石元俊ノ門ニ入リ、後チ江戸ニ赴キ大槻玄澤ニ師事シテ蘭醫方ヲ修メ學成リテ大阪ニ業ヲ開ク、高良齋・緒方洪庵ト相鼎立シテ名籍甚シ。シーボルトノ大阪ニ來リシトキ、ゾノ誤診ヲ論難シテ遂ニ彼ヲ屈服セシメタリ。

嘉永二年十月八日病ンデ歿ス、享年七十九。天王寺口繩阪梅薗院ニ葬ル。

著ス所ニ巴爾坌解剖圖譜・船中備要方・痘疹紀聞・肺病養生心得・孤松軒隨筆・蒲部加兒都アリ。

第百二十四　高野長英

名ハ譲、瑞皐ト號ス。文化元年五月五日陸奥ノ水澤ニ生マル、本姓後藤氏、年十四外叔父高野玄齋ニ養ハル。父ニ強請シテ江戸ニ來ル時ニ文政三年秋、年十七ナリ、堀留町藥舗神崎源造ニ寓ス、源造吉田長叔ノ門ニ入ラシム、苦業三年大ニ進ム、長叔ソノ才ヲ愛シ偏字ヲ與ヘテ長英ト改ム、留マルコト二年、又駒留正見ノ門ニ遊ブ。後チ長崎ニ遊ビシーボルトノ校舍ニ在リテ、挺然等輩ヲ拔ク。天保元年江戸ニ出テ、飜譯ニ從事ス年二十七。先生嘗テ渡邊華山等ト結ビテ尙齒會ヲ作リ、時勢ヲ談ジテ幕府ノ忌避ニ觸レ、獄ニ下ル、天保十二年四月獄火アリ、先生遁ゲテ、西方ニ走ル、後三年捜求稍弛ムト聞キ、再ビ江戸ニ歸リ澤三伯ト變シ、青山ニ家ス、嘉永三年五月幕吏ソノ所在ヲ知リ捕ヘントス、先生刀ヲ拔キ二人ヲ傷ケ、自ラ頸ヲ貫テ死ス、年四十七。

第百二十五　高野長英

史傳前ニ出ヅ。本像ハ渡邊華山ノ筆ナリ、最近ノ發見ニ係レリ。

第百二十六　中川修亭

名ハ故(又定故)字ハ其德修亭ハ其號ナリ、又壺山、又抱神堂主人ト號ス、通稱周貞ト云フ。紀州橋本ノ人、明和七年ニ生マル、鈴木蘭園ノ門ニ在リシガ、天明八年火災後京都ヲ去リ、華岡青洲ノ門ニ入リ外科學ヲ修ム、青洲ガ最初ノ門人ナリ。寛政十五年十月再ビ京都ニ來リ吉益南涯ヲ師トス。文化三年九月、海上隨鷗ノ門ニ入リ、蘭學ヲ研究シ、後チ大阪ニ徒レリ。嘉永三年二月六日其家ニ歿ス、享年七十八。

著ス所ニ、瘍科筌蹄、傷寒發微、醫道古今醫籍考、醫方新古辨、東西醫談、難波尚齒記、同後記、禁方錄、同拾錄、賈生載記、芳翁醫談アリ。

第百二十七　石坂蕙圃

名ハ良民、字ハ蕙圃、通稱篤太、晩ニ桑龜ト改ム。天明六年、美作ニ生マル、年十三、刀圭ノ事ニ志シ、吉益南涯華岡青洲ニ歴事シ、郷ニ歸ル。一日醫範提綱ヲ讀ミ悟ル所アリ、長崎ニ遊ビ、シーボルトニ就キ其術ヲ學ブコト數年、歸郷其業大ニ行ハル。嘉永四年六月九日歿ス、得年六十四。

第百二十八　帆足万里

字ハ鵬卿、通稱里吉、文簡ト號ス。豐後日出ノ人、三浦梅園・廣瀨淡窓ト共ニ九州三偉人ト稱セラル。晩年專ラ文藝學術ニ從事ス。

嘉永五年六月十四日歿ス、享年七十五歳。

著ス所ニ、假字考・修辭通・窮理通・四書標注・五經標注・國語標注・肆學餘論・東潛夫論・入學新論・井樓纂聞・西崎遺稿アリ。

第百二十九　河津省庵

名ハ卓、字ハ子立、省庵ハ其號ナリ。相州相原ノ人、嘗テ芳川波山ニ從フ、波山忍城侯ニ聘ルルヤ先生往テ之ヲ訪フ、遂ニ侍醫ニ召サル。

先生初メ長沙ノ法ヲ修メ、後西洋ノ學ヲ攻メ、數々人體ヲ解剖シテ豁然大ニ悟ル所アリテ醫則發揮ヲ著述ス、古醫方ノ生理書ト見ルモ可ナリ。蘭說ノ妄誕ヲ攻ム、所說ノ稍々奇怪ニ涉ルハ、多クハ時勢ノ罪ニシテ先生ノ識見ヲ左右スルニ足ラザルナリ。嘉永五年八月病デ其家ニ歿ス、年五十三、武州忍城蓮華寺ニ葬ル。

著ス所ニ、醫則發揮五卷、內景圖一卷、病原覈論五卷、治療大全十卷、眼科方規三卷、胎育全書三卷、動物質論二卷、構物性論五卷アリ。

第百三十　楢林宗建

名ハ高房、字ハ潛、通稱宗建、和山ハ其號ナリ。榮哲ノ第二子ナリ、享和二年生マル、文政十年四月父ノ後ヲ襲フテ佐賀侯ニ仕フ、弘化三年二月豐後町ニ塾舍ヲ設ケ大成館トシ、諸生ヲ寄宿セシメテ醫學ヲ教授ス。鍋島閑叟侯西洋牛痘苗ヲ求ムルニ當リ天保二年七月蘭船ノ之ヲ齎スニ及ビ、先生ソノ子建三郎ニ種痘術ヲ受ケセシメシニ善感ス、是ヲ西洋種痘法傳習ノ嚆矢トス。茲ニ於テ先生佐賀ニ歸リ侯ニ謁シ、更ニ公子等ニ種接スルニ何レモ能ク萠生セリ。先生知驗スル所ヲ錄シテ牛痘小考ヲ著ス、種痘ノ祖トス。嘉永五年十月歿ス、年五十一。

第百三十一　堀内忠亮

名ハ忠亮、字ハ君栗、一字忠龍、素堂ト號ス。米澤ノ人、世醫ヲ以テ仕フ、年十一父ヲ喪ヒ、獨リ母ト居ル、辛茹ヲ嘗メテ志操倍潔シ、常ニ江戸ニ遊バント欲スルモ家貧シキヲ以テ果サズ、既ニシテ役都ノ命アリ、乃チ父祖ノ墳ニ謁シテ誓テ曰ク、藩中泰西ノ學ヲナスモノナシ、某之ヲ創メントス、若シ成ラザレバ敢テ再ビ謁セズト。是ニ於テ西上シ官暇ヲ以テ古賀穀堂ニ從テ古文ヲ學ビ、杉田立卿、青地芳滸ニ就テ泰西醫術ヲ修ム、越テ二年擢デラレテ侍醫トナル、後大夫人侍醫ニ轉ジ、祿若干ヲ賜フ。嘉永六年瘡ヲ患ヒ骸骨ヲ乞フテ鄉ニ還ル、翌七年三月意ニ起タズ、年五十四。

著ス所ニ、幼々精義、保嬰瑣言、外科諸書アリ。

第百三十二　土生玄碩

名ハ義壽、桑翁ト號ス。安藝ノ人、十七歳京都ニ出テ和田泰純ニ學ビ、五年ヲ經テ鄉ニ還リ、箕裘ノ業ヲ嗣グ。文化五年四月廣島侯ノ女、江戸ノ邸ニアリ眼ヲ病ム、侯之ヲ憂ヒ先生ヲ召シテ治ヲ托ス、未ダ幾モナラズシテ全癒ス、恩賞太ダ厚シ。居ヲ芝田町ニトス其業益々盛ナリ。文化七年七月擢デテ侍醫トナル、十三年十二月法眼ニ敍セラル。文政十二年シーボルトニ敎ヲ聞ク。先生酬ユルニ葵章服ヲ贈ル、其年十一月シーボルトノ獄起ルニ當リ、連坐シ官祿ヲ褫カラレ、獄ニ下ル、時ニ十二月十六日ナリ。是ヨリ先先生ノ子玄昌侍醫ニ擢ラレ、西丸ニ勤仕セシガ、先生ノ官ヲ奪ハルルニ際シ玄昌亦官ヲ罷メラル。天保八年將軍家慶眼疾ヲ發ス、玄昌ヲシテ之ヲ治セシム、其年七月二十七日玄昌侍醫法眼ニ進ミ祿二百石ヲ受ク、將軍玄碩ノ近狀ヲ聞キ之ヲ許ス。先生獄ヲ出デテ深川木場ニ家居シ、大ニ門戸ヲ張レリ。

嘉永七年八月十七日病ンデ其家ニ歿ス、享年八十七。築地本願寺内ニ葬ル。

著ス所ニ、獺祭錄、師語錄、迎翠堂漫錄アリ。

第百三十三　新宮凉庭

名ハ碩、幼名織造、通稱凉亭、後凉庭ト改ム、鬼國山人ハ其號ナリ、別ニ驅豎齋ト號ス。天明七年三月十三日丹後由良村ニ生マル、年甫メテ十一、從兄有馬丹山ニ就テ醫ヲ學ビ、年十八、業ヲ由良ニ開ク、一日丹波檜山近藤氏ノ宅ニ在リテ宇田川氏撰内科選要黄疸篇ヲ讀ミ、大ニ發憤シ、文化七年八月六日鄕ヲ發シ、長崎ニ赴ク、途次廣島ニ至リ惠美三白ノ門ニ入ル。長崎ニ至ルヤ吉雄如淵ニ贄ヲ執リ大ニ苦學ス後チ蘭醫ヘールケニ接シ、玆ヨリ學術大ニ進ム。文政元年長崎ヲ去リテ鄕里ニ歸ル。翌二年先生年三十三ニシテ始メテ業ヲ京都ニ開ク、名聲遠邇ニ顯ハレ、診ヲ乞フモノ門ニ滿ツ。

先生、東山南禪寺畔ニ黌舍ヲ建テ順正書院ト曰ヒ、軒岐交宣ヲ祭リ、儒者及ビ漢蘭醫書ヲ貯ヘ、且ツ附スルニ學田及ビ資金若干ヲ附シテ四方志學ノ徒ヲ延ク。

安政元年正月九日病デ歿ス、享年六十八。南禪寺塔中天授庵ニ葬ル。

第百三十四　新宮涼庭（木像）

史傳　前ニ出ヅ。

第百三十五　原　老柳

名ハ健、字ハ天行、通稱佐一郎ト呼ビ、老柳ト號ス。攝津西宮ノ人、天明三年二月生マル、村上玄齡ニ就キ醫學ヲ修メ業成リ伊丹ニ歸ル。偶々一篤疾者アリ、先生ニ治ヲ乞ヒ、又新宮涼庭ヲ招キ來診セシメテ主治醫ト面識ヲ請フ、涼庭僻地ノ庸醫共ニ語ルニ足ラズトセリ、會々先生入リ席ニ就キ備サニ其診案處方ヲ述ブ、涼庭之ヲ聞キ、乃チ主人ニ諭シテ專ラ其治ヲ受ケシム、先生後チ大阪ニ移リ、諸醫ノ間ニ崛起シ別ニ一幟ヲ樹テリ。

安政元年六月熱病ヲ得テ歿ス、時年七十二。大阪生玉町齡延寺ニ葬リ觀音像ヲ建テリ、俗ニ老柳觀音ト呼ベリ。

第百三十六　水原三折

名ハ義博、字ハ濟卿、三折ハ其號ナリ。本姓最上氏、近江八幡ノ人ナリ、先生兄弟六アリ、季子ナルヲ以テ本姓ヲ避ケテ水原ト稱ス、少クシテ京都ニ出テ、奥劣齋ヲ師トシ、產術ヲ學ビ、後チ錦小路東洞院ニ住ミテ醫業ヲ開ク。產術ハ賀川子玄嵎ノ鐵鉤同生術ニヨリテ從來ノ舊臭ヲ一洗シタルモ、ソノ術ノ漸ク粗暴ニ流レ、却テ兒腦ヲ碎摧スルノ弊アリ、先生之ヲ見テ浩歎措カズ、覃思搆巧、幾ンド二十年ニシテ鯨鬚ヲ以テ探領器ヲ作リ、產難ニ試ミ、悉ク奇功ヲ奏セリ。產術之レヨリ一變ス、先生功德大ナリ。

先生海上隨鷗翁ニ從ヒ人身內景ヲ學究シ、刑屍ニ就テ親試シ、殊ニ意ヲ陰器ノ解剖ニ注グ陰器解剖圖說アリ。先生天明二年ニ生レ、安政元年七十ニシテ歿ス。

著ス所ニ、探領圖訣三卷、醇生庵產育全書十一卷アリ。

第百三十七　多紀元堅

名ハ元堅、字ハ亦柔、澹庭ト號シ、安叔ト通稱ス、元簡ノ二子ナリ。天保六年內班ニ擧ゲラレ、醫學館教授トナル、翌年法印ニ敍シ、樂春院ト號ス。安政四年二月十四日病歿ス、時年六十三。

著ス所ニ、傷寒論述義、金匱要略述義、素問紹識、雜病廣要、藥治通義、腹診奇侯アリ。

第百三十八　吉益北洲

諱ハ修夫、北洲ハ其號ナリ、通稱道立、後チ正親ト改ム。本姓青沼氏出デテ吉益南涯ノ冢ヲ嗣グ、年二十二ニシテ吉益南涯ニ從フ、南涯老テ子ナシ請フテ養子トス。文化十年六月南涯歿セシトキ、先生年二十六ナリ、箕裘ノ業ヲ繼ギ生徒ヲ授業ス。

弘化元年北越地方ニ漫遊シ、翌二年再ビ金澤ニ赴キ、弘化四年三月金澤藩侍醫トナリ、居ヲ金澤ニ定ム。後チ數年中風ニ罹リ、安政四年八月遂ニ歿ス、享年七十二、金澤寺町國泰寺ニ葬ル。

著ス所ニ、金匱要略精義傷寒論紀聞、金匱要略記聞續々藥徵傷寒論系譜、丸散方、北洲遺稿、北洲遺草アリ、

第百三十九　賀來佐一郎

名ハ佐之、字ハ公輔、佐一郎ト通稱ス。寛政十二年ニ生マル、年少シテ父ノ醫業ヲ學ビ、十四歳、帆足萬里ヨリ學業ヲ受ケ、年二十四杵築ニ醫業ヲ開ク。ソノ後、長崎ニ遊ビ、蘭學ヲ吉雄如淵及ビシーボルトニ就キテ學ブコト四年業成リテ杵築ニ歸ル。天保十四年島原侯ノ醫員トナリ常ニ麻上下ヲ著シ、槍ヲ樹テ往來セリ。嘉永二年牛痘法ヲ蘭醫ニ受ケ偏ク國中ニ行フ、安政四年致仕シテ、ソノ十一月十八日島原ニ歿ス、享年五十九。著ス所ニ、多識圖譜、醫原後世方意解、治痘新書、救荒本草、詩文集、家譜、採藥記アリ。

第百四十　杉田梅里

諱ハ信、字ハ成卿、梅里ハ其號ナリ。文化十四年十一月十一日江戸濱町山伏井戸ノ邸ニ生マル、二十歳ノ時坪井信道ノ門ニ入リ醫學ヲ修メ、和蘭學ヲ窮ム。天保十一年天文臺ノ譯員ニ補セラル、宇田川榕菴・箕作紫川等ト共ニ命ヲ奉ジテ海上砲術全書譯述ノ業成ル、時ニ天保十四年ナリ。弘化二年十一月父立卿歿ス、先生其祿ヲ襲ギテ藩公ノ侍醫ニ任ゼラル。

嘉永二年濟生三方ノ書ヲ出版シ、大ニ公ニ行ハレタリ。安政元年譯員ヲ辭シ、鐵砲洲ニ移リ、風葉散人ト號シ、專ラ砲術訓蒙ヲ譯ス、同三年幕府藩書調所ヲ設クルニ當リ、先生ヲ擧ゲテ教授職トシ、俸米三十口、金二十兩ヲ給セラレ、此歲十二月將軍家定公ニ見ユルコトヲ許サル、藩臣ニシテ謁スルハ特典ナリ。藩侯特ニ格ヲ進メテ祿五十石ヲ加フ、同六年心疾ノ證加リ、二月十九日歿ス、僅ニ四十三歲。

先生ハ獨リ詩文ヲ善クスルコトノミナラズ、又蘭文ヲ綴ルコト自在ニシテ玉川紀行二篇ハ最モ名文ナリ。著ス所ニ、濟生三方醫戒、濟生備考、治痘眞訣、海上砲術全書、增補海軍砲術全書、砲術訓蒙、山砲略說、野砲演習式、萬寶玉手箱、內翳手術解剖刀式、理家必讀アリ。

第百四十一　難波立愿

名ハ經恭、字ハ子敬、抱節ハ其號ナリ、又鳩棄柯集庵ノ別號アリ、立愿ハ其通稱ナリ。備前金川村ノ人、寛政三年ニ生マル、文化二年京都ニ出デ、八年三月吉益南涯ノ門ニ入リテ内科ヲ學ビ、又賀川蘭齋ニ就キテ産科ヲ學ブ、文化十一年四月華岡ノ門ニ入リ、大阪ニ於テ華岡鹿城ヲ師トシテ外科學ヲ修メ歸郷シテ開業ス。文政十二年再ビ京都ニ出デテ古益北洲ニ從遊ス。門人來リ學ブモノ千五百人ニ及ブ。

安政六年八月二十三日病デ歿ス、享年六十九。

著ス所ニ、類聚集方、續類聚集方補正類聚集方、醫林類英、環翠叢談、鳩棄雜選、傷寒髓、鍼灸提要、散花新書、抱節醫言、同後集、方極集覽、觀證辨疑補正、胎産新書、胎産餘篇、敗鼓小錄、橘黃漫筆、醫林摘要、神遺方傍註、思誠堂方極、瘡瘍新書、醫學紺珠、醫家碎玉、執中館記アリ。

第百四十二　山本亡羊

名ハ世孺、字ハ仲直、亡羊ト號ス。京都ノ人、安永七年六月十六日生ル、年十六小野蘭山ニ從ヒ本艸學ヲ受ク、其醫術一家ノ說ニ局セズ、又廣ク藥艸ヲ探リテ培養セリ、

安政六年十月十六日舊疾發シテ十一月二十七日卒ス、享年八十二。

著ス所ニ、助字註釋備考、藥名考、片言錄、百品考、格致類編アリ。

第百四十三　館　玄龍

名ハ成章、字ハ君慶、北洋ト號ス、玄龍ハ通稱ナリ。越中射水郡三十三箇村ノ人、寛政七年ニ生マレ、十四歳ニシテ醫道ニ志シ、年十九華岡青洲ノ門ニ入ル、時ニ文化十一年十一月二十二日ナリ。居ルコト八年ニシテ其祕奥ヲ受ケ京都ニ遊ビ更ニ江戸ニ僑居セリ、年三十養父芸陵ノ病ニヨリ歸省シ復出デズ。安政六年十一月十日病ンデ歿ス、時年六十五。

著ス所ニ、瘍科髓、內科髓、傷寒論活義、孔嵩祕訣、葑菲醫談、北洋漫筆アリ。

第百四十四　緒方洪庵

名ハ章、字ハ公裁、備中足守藩ノ人、先生身體羸弱武技ニ勝ヘズ、常ニ方伎ノ志アリ、文政七年、年十五父ニ從ヒテ大阪藩邸ニ在リ、中天游ニ就テ西洋醫術ヲ學ブ。天保二年東遊シテ坪井信道ノ門ニ入リ研鑽怠ラズ、學大ニ進ム、又宇田川玄眞ニ就テ教ヲ受ケ、後七年長崎ニ出デテ蘭人ニ親炙シ、凡ソ三年ニシテ業ヲ大阪ニ開ク、時ニ年二十七。生徒日ニ衆シ、藩侯擢デテ侍醫トナシ俸八口ヲ受ク。文久二年幕府徵ス、由テ江戸ニ來リ侍醫トナリ、醫學所頭取トナル、文久三年六月十日病デ歿ス、年五十四。

第百四十五　大槻俊齋

名ハ肇、字ハ仲敏、弘淵ト號ス、陸前桃生郡赤井村ノ人、出デテ沸谷氏ヲ嗣ギ醫タラシム、時ニ年十六ナリ。先生窃ニ天下ノ名醫タラント期シ、父ニ其志ヲ告グ、父之ヲ許サヾリシヲ以テ兄龍之進私カニ江戸ニ奔ラシメ川越侯ノ醫官高橋尚齋ノ家ニ仕ヘテ僮僕トナリ、閑ヲ偸ミテ書ヲ讀ム、尚齋其志ヲ感ジ門生トナシ、更ニ手塚良仙ニツカシム、後數年良仙資ヲ給シテ天保八年長崎ニ遊學セシメタリ。緒方洪庵モ亦茲ニアリ相俱ニ研磨セリ、長崎ニ在ルコト數年、江戸ニ歸リ、天保十一年長沼侯ニ聘セラレテ醫官トナレリ。良仙女ヲ以テ之ニ妻シ、下谷練塀小路ニ業ヲ開カシム。弘化二年三月神田ニ火災アリ、獄舍ノ四近ニ迫リタルヲ以テ囚人ヲ開放ス、時ニ高野長英捕レテ永囚ノ身トナリシガ、長英獄ヲ出デテ歸ル意ナク、俊齋ノ家ニ入リ强テ衣服金錢ヲ借リ、其往ク所ヲ知ラズ、此事終ニ警吏ノ知ル所トナリ、百日閉門ノ刑ニ處セラル。

俊齋セリウス及モストノ外科書ヨリ銃創療治ノ要領ヲ抄譯シテ銃創瑣言一冊ヲ著セリ、江川太郎左衞門英龍此書ヲ見テ當今ノ急務ナルヲ嘆稱シ、自ラ官ノ允許ヲ乞ヒ上梓セリ、時ニ安政元年八月ナリ。天保十二年痘痂ヲ施シ良好ヲ得タリ、之ヲ都下種痘ノ濫觴トス。安政四年八月神田於玉池ニ同志ト共ニ種痘所ヲ建ツ、萬延元年十月徵サレテ官醫トナリ、種痘所頭取ニ補セラル、翌年西洋醫學所ト改ム、之ヲ西洋醫學公行ノ始トス。文久元年十一月十一日胃硬結腫ニ罹レリ、自ラ起ザルヲ知リ、家人ニ告グ、文久二年四月九日終ニ溘焉トシテ逝ク、享年五十七、本鄉區駒込千駄木町總禪寺ニ葬ル。

第百四十六　箕作阮甫

名ハ虔儒、字ハ庠西、紫川又ハ逢谷ト號ス。津山ノ人、寛政十一年九月六日生マル、長ズルニ及ビテ京都ニ遊ビ、醫書ヲ研究シ、文政五年津山藩侍醫ニ擢セラレ、後藩公ニ從ヒ、江戸ニ祇役ス。此時宇田川榛齋ノ西洋醫學ノ說ヲ聽キ、改メテ專ラ洋學ヲ攻ム、數年ナラズシテ業大ニ進ム、天保十年幕府天文臺譯員ニ補セラレ、安政三年洋書調所教授ニ擧ゲラレ、文久二年幕籍ニ列ナル、西洋學者ノ士籍ニ列スルモノヽ初メナリ。

文久三年六月十七日病ンデ終ル、得年六十五、白山淨土寺ニ葬ル。

第百四十七　鳩野宗巴（七代）

幼名麒二郎ト云ヒ、諱ハ宗俊、字ハ明卿、壺井ト號ス。文化十二年二月二日熊本ニ生マル、肥後神童ノ名アリ、年十二藩校時習館ニ入ル、年十六ニシテ其父病アリ儒學ヲ廢テ、醫學ヲ修ム、後チ豐後竹田ノ植村文達ニ就キ華岡流外科ヲ學ビ、其術ニ熟シ、伊豫ノ鎌田、大阪ノ華岡ト並稱シテ關西ノ三外科大家ト呼バル。又家塾ヲ興シ、生徒ヲ教育シ、牛痘ノ接種ヲ藩内ニ奬勵ス。

文久三年十一月十四日歿ス、享年四十九。

第百四十八　賀川蘭臺

名ハ滿崇字ハ子德蘭基ト號ス。文政六年三月年二十八ニシテ典藥寮醫生ニ補セラレ、正七位下ニ敍シ上總大椽ニ任ゼラル。嘉永五年三月典藥寮醫員ニ補セラレ、尋テ女醫博士トナリ、從五位下ニ敍シ、筑前守ニ遷任ス。文久四年二月一日歿ス、享年六十九。纏頭絹ノ發明アリ。

第百四十九　花野井有年

父吉五郎賭博遊俠ヲ以テ事トシぐわん吉ト呼ブ、先生ハ其第一子ニシテ寛政十年三月廿一日駿府ニ生マル、先生年二十一、家ヲ弟ニ讓リ、江戸ニ出テ和蘭醫方ヲ學ブ、貧苦ニ堪エ精勤ス。一時病ヲ以テ家ニ歸リ、二十四歳再ビ江戸ニ來リ小篠先生ニ醫ヲ問ヒ傍ラ開業ス。二十六歳家ニ歸リ業ヲ開ク、文政六年二月ナリ。明年又江戸ニ出テ轉ジテ大阪ニ行キ、橋本曇齋ニ醫事ヲ問ヒ、翌八年郷ニ歸リ駿府安西ニ居住ス。天保七年十二月七日豁然トシテ皇國醫方ニ志シ、醫方正傳初篇二卷ヲ著ス、文中漢方家ヲ斥クル太甚シキヲ以テ官開校ヲ許サズ。慶應元年十一月二十四日病ヲ以テ歿ス、享年六十七。靜岡市安西一丁目瑞光寺ニ葬ル。

著ス所ニ西學便覽・西學斷診候精要・內景一覽・經驗大同類聚方藥品名會經過藥錄・疫疾先防・群方雜記藥名韻譜・本草類聚證・神道明辨・圖錄アリ。

第百五十　飯沼慾齋

名ハ長順、慾齋ハ其號ナリ、幼名本平、後專吾ト改ム、伊勢龜山ノ西村新右衞門ノ二男ナリ。七八歲ノトキ出デテ大都ニ學バンコトヲ乞フ父母之ヲ許サズ、十二歲ノトキ意ヲ決シテ單身出デテ叔父美濃大垣飯沼長意ニ投ズ、後チ同姓飯沼長顯ノ家ニ依食シ、孜々精勵、比年ニシテ學業大ニ進ム。十四五歲頃小野蘭山翁ノ濃州ニ來ルニ際シ、翁ノ門ニ入リ本草學ヲ修メ隨所常ニ從ツテ跋涉採藥シ、其學頓ニ進ム。十八九歲ニシテ京都ニ遊ビ、福井丹波守ノ門ニ入リ醫ヲ學ビ、日夜勉勵、學成リテ大垣ニ歸ル。次デ長顯ノ嫡女ト婚シ、其箕裘ヲ繼ギ名ヲ龍夫ト改ム。先生ノ友吉安三榮、蘭醫ノ治術迥ニ漢方ニ優ルコトヲ說ク、先生之ヲ聞キ悟ル所アリ、斷然意ヲ決シ家財什具ヲ賣リ、又友人ニ謀リ書籍講ヲ作リテ學資ヲ募リ、妻子ヲ親族ニ托シテ江戶ニ出デ宇田川榛齋ニ就テ蘭學ヲ修ム、時ニ年二十八歲ナリキ。又傍ラ藤井方亭ニ就キテ學ブ、方亭ノ家ハ下谷ニ在リ、宇田川塾ヲ距ルコト里餘朝ニ出デテ夕ニ歸ル、寒暑風雪曾テ一日モ通學ヲ怠リシコトナシ、又絕テ他ノ娛樂ニ神思ヲ縱タズ、淺草觀音ノ如キモ師家藤井通學ノ日、雷門前ヲ過ギシコト幾十回ナルモ、終ニ饗詣ヲ果サザリシト。學大ニ進ミ鄕ニ歸リテ蘭學ヲ唱ヘ、更ニ醫業ヲ始ム、聲名四方ニ馳セタリ。

先生年五十ニシテ義弟健介ニ讓リ、自ラ隱退シテ城西長松村ニ別業ヲ築キテ移リ、皇朝草木圖說三十卷ヲ著ハス、時ニ七十餘歲ナリ。

慶應元年五月五日家ニ歿ス、享年八十四、大垣本街圓覺寺先塋ノ次ニ葬ル。

第百五十一　三宅艮齋

名ハ溫、字ハ子厚、肥前國南高來郡北有馬村ノ人ナリ、十四歲ニシテ父ヲ喪ヒ、長崎ニ出デテ楢林榮建ノ門ニ入リ醫ヲ學ブコト八年、天保十二年歲二十二、江戸ニ來リ藥研堀ニト居シ、父ノ名ヲ襲ヒテ英齋ト稱シ、醫ヲ以テ行ハル。明年十月下總銚子港ニ移リ、弘化元年三月堀田侯ニ聘セラレ下總ノ佐倉ニ赴ク、安政五年江戸西洋醫家五十餘人ト相共ニ社ヲ結ビテ種痘館ヲ建ツ。英醫合信ノ著ス西醫略論・內科新說・婦嬰新說ヲ飜刻シテ世ニ行ル。六年土佐侯ニ召サル、文久年醫學所教授トナレリ。慶應四年七月三日病デ本所ノ家ニ歿ス。本鄉區駒込願行寺ニ葬ル、年五十二、今ノ秀先生ハソノ子ナリ。後チ墓ヲ谷中天主寺葬地ニ移ス。

第百五十二　桑田立齋

名ハ和、字ハ好爵、越後新發田村松正親ノ第二子ナリ。年十八、江戸ニ來リ坪井誠軒ノ門ニ入リ居ルコト多年、學大ニ進ム、天保十二年正月誠軒ノ媒ニテ桑田玄眞ノ嗣トナリ、深川萬年橋畔ニ別居シ醫業ヲ開ク。養父玄眞ノ人痘種法ヲ得テ施スコト數百人ニ及ブ、後チ牛痘種法ヲ知ル、偶々嘉永二年蘭醫モーニツクノ齎ラセシ牛痘苗ノ長崎ニ於テ奏效シ、ソノ傳フル所ノ苗ヲ得テ子兒ニ接種セシ以來、連綿保續シ、二十年間一日ノ如ク痘前ノ小兒ヲ見レバ則チ其家ニ於テ施術シ、一心十萬兒ニ及サンコトヲ期セリ。

天保年間琉黃浴ヲ造リ疥癬患者ニ施シ、又沃陣浴ヲ作リ黴毒患者ニ施ス。安政四年蝦夷地痘瘡流行ス、官命アリ先生、蝦夷ニ赴キ屢々危難ヲ冒シ全蝦夷ヲ跋渉シ、三ケ月間ニ六千餘人ニ種痘ヲ施シ、十一月四日江戸ニ歸レリ。官其功ヲ賞シ、金二百五十兩ヲ賜フ。

文久三年七月都下麻疹大ニ流行シ、加フルニ虎列刺大ニ猖獗ヲ究メ、痘苗將ニ絶エントス、先生ノ困苦極メテ甚シ、日夜思慮ヲ勞シ辛ジテ其苗ヲ維持スルコトヲ得タリ。慶應三年六月偶々中風症ニ罹リ半身不隨ニシテ治セズ、翌四年七月廿七日遂ニ歿ス、享年五十八。此時マデ自ラ下シタル種痘兒既ニ七萬餘人ニ及ビタレドモ、十萬兒ヲ期セシ素志ヲ遂ゲザルヲ憾トシ、種痘針ヲ手ニシテ瞑目セリト、淺草橋場法源寺ニ葬ル。

先生嘗テ濟幼院(育兒院)ノ設立ヲ企テ、安政三年上野門主ニヨリ之ヲ官ニ請ヒシモ、遂ニ實施スルニ至ラザリキ。著ス所ニ牛痘發蒙引痘要略解愛育茶譚、三濟私話、濟幼問答、濟幼院建設意見書アリ。

第百五十三　日高凉臺

名ハ精、又惟一、字ハ子精、六々堂玄花散人遯叟ト號ス。安藝新庄ノ人、寛政九年十二月十日生マル、幼ニシテ佛門ニ入リシガ、出テ他郷ニ奔リ、文化四年新宮凉庭ノ廣島ニ淹留スルヲ聞キ、蘭醫方ヲ聞キ醫ニ志セリ、時ニ年十一。文化十三年大阪ニ出テ、十四年凉庭ニ面接シ、福井棣園ニ師事シ、文政六年歸郷シテ醫業ヲ開ク、同八年長崎ニ赴キシーボルト及ビ吉雄權之助ニ從ヒテ蘭醫學ヲ俯メ、同十一年伊豫ニ遊バントシ、海路船難破シ、漸クニシテ宇和島ノ漁夫ニ救ハレ遂ニ其地ニ留マリテ醫療ヲ施セリ。十一月大阪ニ出デ、天保十三年十一月安藝竹原ニ歸リ遯叟ト號シ再ビ出デズ。

明治元年九月十七日病ンデ歿ス、年七十二。竹原町不老長生寺ニ葬ル。

著ス所ニ、用藥便覽・變通三十方・種痘新書・種痘實驗錄・藥草藝法・瘍科精義・異法產論・分離學律・處方律・西洋醫事辨惑・三十六方口訣・六々堂藥例・六々堂療法・家言方意口訣・眼療提耳・蘭書訣記・たれをかも辨髦篇・類鶩篇アリ。

第百五十四　鹽田順庵

名ハ泰、字ハ順庵、松園ト號ス。金澤ノ人、本姓宮河、江戸ニ來リ、增島蘭園ノ門ニ入リ經史ヲ講習シ、家ニ歸リ醫ヲ業トス。父歿ス、幕府醫官鹽田宗溫嗣ナキヲ以テ松園ヲ强テ養子トス。安政二年幕府ノ命ニ應ジテ函館ニ居ルコト六年、學校ヲ興シ、病院ヲ建テ其他經營スル所多シ。文久二年召レテ江戸ニ歸リ寄合ニ進ミ、醫學教諭ヲ兼ヌ、後處士トナリ、再ビ函館ニ干役ス、幾モナク東京ニ歸リ、明治二年二月七日病デ家ニ歿ス、享年六十七。

第百五十五　廣瀨元恭

名ハ元恭、字ハ禮卿、藤圃、又天目山人ト號ス。甲斐藤田村ノ人ナリ、年十五江戸ニ出テ坪井誠軒ノ門ニ入リ蘭醫方ヲ修ム、又野田笛浦ニ從テ詩文ヲ學ブ、居ルコト十餘年ニシテ京幾ニ遊ブ、後留テ業ヲ開ク、諸生集マルモノ日ニ多シ。津侯ノ聘ニ應ジ醫員トナリ京ニ居テ二十四口ヲ食ム。兵書ヲ譯シ、遙ニ之ヲ侯ニ獻ズ、慶應初年砲壘ヲ八幡山崎ニ築ク。明治維新ノ際、京都病院ノ長タリ。明治三年十一日十七日終ニ其家ニ歿ス、享年五十、堀河本國寺ニ葬ムル。

著ス所ニ、理學提要、知生論、西醫脈鑑三卷、刀圭餘事一卷、新訂牛痘奇法一卷、人身窮理三十卷、解剖詳辨八卷、病理正解、窮理對問、三物名義、築城新法、諸器圖解、地理志、砲術新書、時習堂實試說アリ。

第百五十六　伊東玄朴

名ハ淵、字ハ伯壽、冲齋ト號ス。肥前神崎郡仁比山村ノ人、本姓執行、寛政十二年十二月二十八日生マル、年十六、醫學ニ志シ、年廿三ニシテ佐賀ニ出テ蘭書ヲ學ブ、二十四歳ノトキ長崎ニ出テ、和蘭通詞猪股傳右衞門及ビシーボルトニ就キ蘭學及ビ醫學ヲ傳習ス。文政九年猪股妻娘兩人ノ出府ニ附添ヒ江戸ニ出デ、本所番場町ニ住ミ後チ同十二年下谷長者町ニ轉住シ、天保四年三タビ下谷和泉橋通徒士町ニ移リ醫業ヲ開ク。同十一年伊東家ニ由緒アルニヨリ伊東ト改ム。同十二年鍋島家ニ召サレ祿七人口ヲ受ク、弘化二年鍋島閑叟公和蘭ヨリ始メテ牛痘苗ヲ取寄ス、玄朴娘春子ニ接種シテ後チ同公孃貢子ニ種シニ兩人トモ良結果ヲ得タリ。爾來該苗ヲ以テ自宅ニ於テ一般人民ニ接種ス。後チ和泉橋通徒士町ニ廣大ナル種痘所ヲ建設スルニ至レリ。

安政五年七月二日將軍家定公ヨリ召サレ高三十人扶持下サレ奥醫師仰付ラル。同年十一月二十三日法橋ニ敍シ同日法眼ニ敍セラル、萬延二年十二月十六日法印ニ敍セラレ長春院ト稱フ。文久二年三月三日醫學所取締ヲ命ゼラレ、慶應四年二月十七日願ノ通隱居閑居ケラル。明治四年一月二日死亡ス、享年七十二歳。

第百五十七　川本幸民

名ハ裕、裕軒ト號ス、通稱幸民、攝津三田ノ人、年十八醫ヲ學ビ、後チ江戸ニ出デテ足立長雋ノ塾ニ寓シ、蘭學ヲ修ム、後坪井誠軒ノ門ニ入リ切磋四年學大ニ進ミ、京阪ニ遊ブ。天保五年九鬼侯ノ醫官トナリ、侯ニ從テ再ビ江戸ニ來リ、芝露月街ニト居シテ醫業ヲ開ク。安政三年幕府洋書調所教授トナリ、文久二年幕籍ニ列ス、明治元年三田ニ歸リ、明治三年又東京ニ來リ、翌四年六月一日病ヲ以テ其家ニ歿ス。

著ス所ニ、氣海觀瀾廣義、遠西奇器述理、學原始、地球理說、舍密讀本、舍密眞言、化學初敎、化學通依、百乙人身窮理、藥治溯原、硝石考、暴風說、汽船說アリ。

第百五十八　本間棗軒

初ノ名ハ資章、後チ救ト改ム、字ハ和卿、通稱ハ玄調、棗軒ハ其號ナリ。母本間氏、宗家本間資成子ナシ先生ヲ養子トス。年十七文政三年、初メテ醫學ニ志シ、原南陽ニ師事シ、更ニ笈ヲ負ヒテ江戸ニ出テ杉田立卿ニ從ヒ、西洋醫術ヲ學ビ、傍ラ大田錦城ニ經學ヲ問フ時ニ年十八ナリ、居ルコト三四年未ダ之ニ滿足セズ、長崎ニ遊ビ、蘭人シーボルドニ贄ヲ執ル。先生ノ志、漢洋ヲ博綜シ、其長所ヲ擇デ以テ一家ヲナスニ在リ、而シテ專ラ心ヲ外科ニ用フ。遂ニ京都ニ來リ高階枳園ヲ師トシ、紀伊ニ赴キテ華岡青洲ヲ師トス、時ニ年二十、其門ニ止マルコト數年ノ後、再ビ江戸ニ來リ、日本橋樽正町ニ於テ治術ヲ施ス。召サレテ水戸侯ノ侍醫トナリ水戸ニ赴ク、醫學校教授トナリ名聲駿發ス。天保八年十二月瘍科祕錄ヲ著ハシ、安政六年續瘍科祕錄成ル。學說治術ノ人世ニ鴻益スル所多シ、之ヨリ先キ水戸ニ正奸兩黨アリテ互ニ相鬩グアリ、先生正黨ニ屬スルヲ以テ之ニ坐セラレ幽禁ヲ受ク。元治元年先生年六十一ニシテ內科祕錄ノ著アリ、明治五年二月八日年六十九疾デ卒ス。著ス所ニ右三書ノ他、傷寒論類釋醫方纂要、療治知要、經穴撮要、藥寶雜識、保嬰須知、乳癌新割圖賦、膀胱結石治驗、皇朝醫林談、日新醫談、詩文集等アリ。

第百五十九　竹内玄同

名ハ幹、字ハ玄同、西坡ト號ス。賀州大聖寺ノ人、叔父玄秀ノ家ヲ嗣グ、玄秀世々越前丸岡侯ノ醫官タリ。先生壯年京都ニ遊ビ藤林普山ニ從ヒテ蘭學ヲ攻メ、後長崎ニ至リシーボルトニ就ク學成リテ鄉ニ歸リ侍醫トナル。天保六年江戸ニ移リ、十三年蘭書飜譯手傳ヲ命ゼラル。安政五年將軍家定公病アリ、乃チ先生及ビ伊東玄朴、戸塚靜海ヲ學ゲテ侍醫トナス、實ニ是レ幕府ノ西洋內科術ヲ採用セルノ始メナリ。後チ進ミテ法印ニ敍セラレ渭川院ト號ス、西洋醫學所長ヲ兼ヌ。文久三年將軍家茂公ニ從テ京都ニ入ル、旣ニシテ公病篤シ、先生夙夜侍奉尋側ヲ離レズ、時ニ適マ眼ヲ病メルモ治スルノ暇ナク遂ニ明ヲ失フ。慶應二年一月家茂公遂ニ薨ズ、是ニ於テ仕ヲ致シ、懷ヲ風月ニ寄セテ、復タ世事ヲ問ズ。明治十三年家ニ歿ス、享年七十六、青山梅窓院ニ葬ル。

第百六十　森　立之

字ハ立夫、名ハ立之、枳園ト號シ、通稱養眞ト呼ブ。文化四年十一月江戸ニ生マル、世々醫ヲ以テ福山侯ニ仕フ、文政四年年十五父ヲ喪ヒ養竹ト改ム。天保八年二月故アリテ祿ヲ失ヒ、相州ニ落魄スルコト十二年、ソノ間半バ儒トナリ、半バ醫トナリテ辛苦セリ。弘化五年五月許サレテ再ビ江戸ニ住ム、嘉永七年醫學館講師トナリ、醫心方ヲ校正セリ、慶應四年備後福山ニ移リ、明治五年五月東京ニ來リ文部省ノ小吏トナリ、十二年大藏省ニ入ル。明治十八年十二月六日歿ス、享年七十九、池袋丸山洞雲寺ニ葬ス。

著ス所ニ遊相醫話、素問攷註、千金方筆記、外臺祕要筆記、玉機微義筆錄、五臟六腑和名攷、溫和藥寶、開藏圖譜、新編本草經義註、桂川醫話、禽譜、釋魚譜アリ。

第百六十一　權田直助

名越廼舍ト號ス、武藏毛呂本郷ノ人。年十九、幕府醫官野間廣春院ニ就キ修學三年、後チ歸郷シテ開業ス。年二十三平田篤胤ノ門ニ入リ治療ヲ門人ニ、家事ヲ妻ニ托シ一室ニ籠リ著述ニ從事ス。文久三年上洛シ縉紳ト交リ勤王ノ道ヲ說ク、維新ノ後監察司知事大學中博士醫道御用掛ニ任セラル。明治四年四月嫌疑ノ事アリ官ヲ罷メラレ前田邸ニ幽閉セラル。明治六年相模ノ阿夫利神社ニ奉仕ス。明治二十年六月八日歿ス、時年七十九。

著ス所ニ、古醫方經驗略、大同類聚方考、古醫道治則、古醫方藥方略、古醫道沿革考、くすしの一言、心ノ柱、名越廼舍老後集アリ。

第百六十二　今村了庵

名ハ亮、祇鄕、又ハ復庵ト號ス、山縣少貳ノ裔ナリ。天保元年佐藤一齋ニ就キ經學ヲ修メ、同三年多紀安叔ニ從ヒテ醫學ヲ修メ、安政五年江戸瀨戸物街ニ開業ス。幾モナク醫學館講師ニ補セラレ、明治二年大學ニ於テ漢醫學ヲ講筵ス、十二年八月明宮拜診醫ニ擧ゲラル。明治二十三年一月十三日歿ス、年七十七、谷中天王寺葬地ニ葬ル。

著ス所ニ、醫事啓源、脚氣鈎要、脚氣新論、鍼灸指掌、三病考、洋方醫傳、脚氣摘要、日本醫道沿革考、醫事問答、杏林餘興、西醫指要、麻疹袖曆、醫案類篇、癖疾新論、醫穀、了庵謄稿アリ。

第百六十三　林洞海

名ハ彊、字ハ健卿、洞海ハ其號ナリ、後チ通稱トス、別ニ存誠齋、梅仙、茶農ノ號アリ。文化十年三月三日豐前篠崎村ニ生マル、年十三、軒岐ノ術ヲ修メ、天保三年年二十、江戸ニ來リ足立長雋ノ門ニ入リ蘭醫方ヲ學ブ。佐藤泰然長崎ニ到ルトキ伴フテ同行ス、二年ヲ經テ再ビ共ニ江戸ニ歸レリ、時ニ天保十三年、年三十一ナリ。泰然佐倉侯ニ召サルヽトキ、其長女子ヲ先生ニ嫁シ、泰然ノ舊廬ニ業ヲ開カシム。

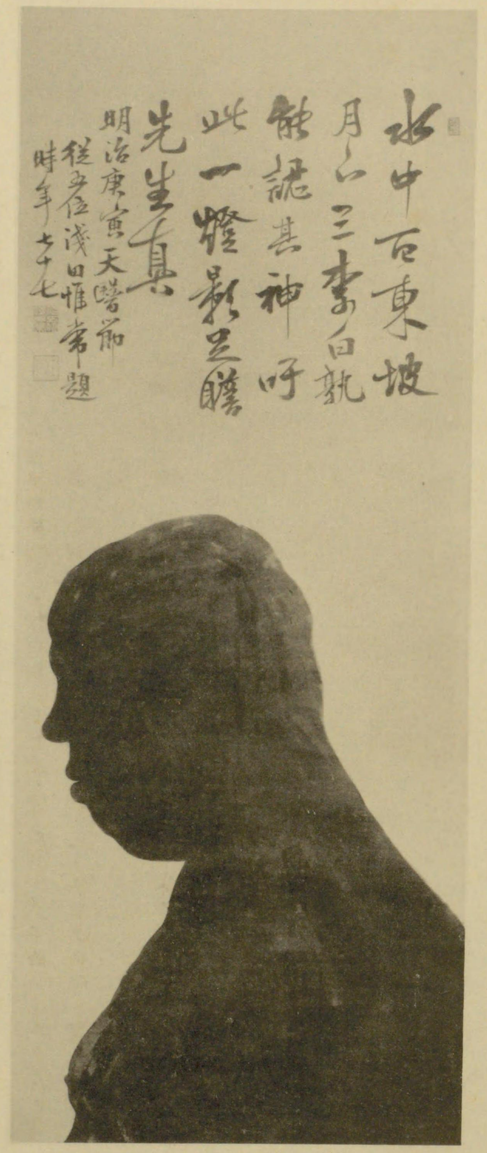
萬延元年幕府ニ召サレ奥詰醫師トナリ、翌二年法眼ニ敍セラル。明治三年大學中博士トナリ、大阪府醫學校長トナル、後チ權大典醫トナリ、皇太后附ヲ命ゼラレ、陸軍々醫總監トナル。明治二十八年一月二十三日偶偶肺炎ニ罹リ、二月二日遂ニ歿ス、享年八十三、本郷區駒込吉祥寺ニ葬ル。

著ス所ニ、窓篤兒藥性論、內科簡明、成誠齋歌集、目代耳代茶農漫錄、衣裳私說アリ。

第百六十四　淺田宗伯

名ハ惟常、字ハ識此、通稱宗伯、栗園ハ其號ナリ、文化十二年生マル。年十三、松本藩儒臣木澤天倪ニ詩文ヲ受ケ、後出デテ高遠藩ニ遊ビ中村中倧ニ就テ儒醫ノ要義ヲ問フ、年十八、京都ニ行キ中西吉益川越ノ諸門ヲ叩キ、年二十二江戸ニ來リ、本康宗圓ノ門ニ入ル、宗圓、多紀茝庭、小島學古、喜多村栲窓ト親炙ス、安政五年疫痢流行ス、先生此歳病ヲ診スル凡ソ二千九百九十三人ナリキ。六年幕命ニヨリ醫心方ヲ校訂シ、文久元年徵士ニ列セラル。慶應元年八月佛國公使レヲン・ロセツ病アリ衆治效ナシ、先生招カレ治療ヲ施シテ效ヲ奏ス、幕府賞スルニ白銀二十錠ヲ以テシ、佛帝亦賞ヲ贈レリ。慶應二年世俸三十口廩米二百苞ヲ受ケ、法眼ニ敍セラル。明治四年職ヲ辭シ牛込ニト居ス、明治十二年明宮侍醫トナレリ、二十一年五月東宮侍醫ヲ辭ス、時ニ年七十四。二十七年二月病家ヨリ歸リ忽チ病ヲ獲、三月十六日家ニ歿ス、享年八十二。

著ス所ニ、皇國名醫傳、杏林風月、先哲醫話、傷寒辨術、脈法私言、雜病辨要、傷寒論識、雜病論識、古方藥註、橘窓書影、牛渚漫錄、醫學典型、暴瀉須知、傷寒翼方、雜症翼方、讀史閒話、治瘟編、醫醫紀事、原醫、西醫指要、脚氣提要アリ。



第百六十五　小島尙質

字ハ學古、名ハ尙質、通稱喜庵、後チ春庵ト改ム、寶素ハソノ號ナリ。寛政九年生マル、母ハ前野蘭化ノ娘ナリ。享保三年九月家督ヲ嗣ギ、文化十年十月醫學館藥調合役ヲ命ゼラレ、文政四年四月二日番醫師トナリ、天保六年八月十六日奥詰ニ進ミ、同七年十二月十六日法眼ニ敍セラル、同十一年三月二十四日奥醫師ニ進ム、弘化三年五月十二日醫學館世話役ヲ命ゼラレ、嘉永元年十二月七日歿ス、享年五十二。

寶素一日伊東三溪ヲ訪フ、三溪偶々浴ヲ進ム、寶素浴畢リ燈前ニ佇立ス、ソノ眞影紙窓ノ間ニ映ス、三溪直チニ筆ヲ下シテ此圖ヲ作レリ。

ア

青木昆陽〔五〇〕
安藝守定〔一〇〕
淺田宗伯〔一六四〕
淺井圖南〔六一〕
嵐山甫安（木像）〔二九〕

イ

池田瑞仙〔八五〕
伊澤信恬〔九七〕
石坂蕙園〔一二七〕
出雲廣貞〔七〕
伊東玄朴〔一五六〕
稲生若水〔三八〕
飯沼慾齋〔一五〇〕
今大路玄淵〔二八〕
今村了庵〔一六二〕
岩崎灌園〔一一三〕

ウ

宇田川玄隨〔六七〕
宇田川榕齋〔一〇二〕
宇田川榕菴〔一一六〕
宇津木昆臺〔一二〇〕
宇津木昆臺（木像）〔一二一〕
海上隨鷗〔八〇〕

エ

越後丹介〔九〕
江馬蘭齋〔一一〇〕
惠美三白〔五七〕
井上玄徹〔二六〕
同　玄徹（木像）〔二七〕
井上稚川〔四八〕

オ

大槻玄澤〔九三〕
大槻俊齋〔一四五〕
岡節齋〔一一九〕
緒方洪庵〔一四四〕
緒方春朔〔七八〕
小川汶庵〔一一八〕
岡本玄冶〔二〇〕
奥劣齋〔一〇四〕
奥村良竹〔四六〕
越智平庵〔三九〕
小野蘭山〔七七〕

カ

貝原益軒〔三七〕

高良齋〔一一七〕
賀川玄廸〔五三〕
賀川玄悅〔五二〕
賀川有齋〔六四〕
賀川蘭齋〔一〇一〕
賀川蘭臺〔一四八〕
香川修庵〔四四〕
各務文獻〔九八〕
賀來佐一郎〔一三九〕
片倉鶴陵〔九一〕
片倉鶴陵（木像）〔九二〕
香月牛山〔四二〕
河津省庵〔一二九〕
川越衡山〔九六〕
川本幸民〔一五七〕
僧鑒眞〔三〕

キ

僧行基〔一〕

ク

桑田立齋〔一五二〕
僧觀勒〔二〕

コ

小石元俊〔七六〕
小石元瑞〔一二三〕
後藤艮山〔四一〕
小島尙質〔一六五〕
小森桃塢〔一一四〕
權田直助〔一六一〕

サ

齋藤方策〔一二三〕

シ

鹽田順庵〔一五四〕
新宮涼庭〔一三三〕
新宮涼庭（木像）〔一三四〕

ス

杉田玄白〔八六〕
杉田玄白（木像）〔八七〕
杉田梅里〔一四〇〕
杉山和一〔三〇〕

セ

瀨丘長圭〔五五〕
施藥院全宗〔一四〕
施藥院宗伯〔二一〕

ソ

曾谷慶祐〔一二〕

タ

戴曼公〔二三〕
高野長英〔一二四〕
高野長英〔一二五〕
多紀元堅〔一三七〕
多紀柳浩〔九四〕
多紀安長〔七九〕
竹內新八〔八一〕
竹內玄同〔一五九〕
田代三喜〔一一〕
竹中南峰〔一〇八〕
館玄龍〔一四三〕
橘南蹊（宮川春暉）〔七五〕
橘元周〔七三〕
建部清菴〔五八〕
田中張海〔六三〕
丹波雅忠〔六〕
丹波康賴〔四〕
丹波康賴（同）〔五〕

テ

寺井玄溪〔三五〕

ナ

中川修亭〔一二六〕
中神琴溪〔一〇〇〕
楢林鎮山〔三四〕
楢林嵋山〔六六〕
楢林宗建〔一三〇〕
難波立愿〔一四一〕

ニ

僧忍性〔八〕

ノ

野間三竹〔二二〕
野呂元丈〔四五〕

ハ

橋本宗吉〔一〇七〕
畑黃山〔七四〕
畑柳泰〔九九〕
鳩野宗巴（初代）〔三二〕
鳩野宗巴（七代）〔一四七〕
華岡青洲〔一〇五〕
華岡青洲（還曆賀像）〔一〇六〕
華岡鹿城〔九五〕

花野井有年〔一四九〕
土生玄碩〔一三二〕
原南陽〔八九〕
原老柳〔一三五〕
林洞海〔一六三〕

ヒ

平賀源内〔五四〕
平田篤胤〔一一五〕
日高凉臺〔一五三〕
廣瀬元恭〔一五五〕

ホ

堀杏庵〔一九〕
帆足万里〔一二八〕
堀内忠亮〔一三一〕
本間棗軒〔一五八〕

マ

前野蘭化〔七〇〕
松岡恕庵〔四三〕
松平君山〔五九〕
松下見林〔三三〕
曲直瀬道三〔一三〕
曲直瀬正琳〔一五〕
曲直瀬正純〔一六〕
曲直瀬玄朔〔一八〕

ミ

三浦梅園〔六二〕
御園意齋〔一七〕
御園中渠〔四九〕
水原三折〔一三六〕
箕作阮甫〔一四六〕
三宅艮齋〔一五一〕
三輪東朔〔八八〕

ム

向井靈蘭〔二四〕
村井椿壽〔八四〕

モ

最上徳内〔一〇九〕
本居宣長〔六九〕
本木仁太夫〔六五〕
本木蘭汀〔九〇〕
本木良意〔三一〕
百々漢陰〔一一一〕
森立之〔一六〇〕

ヤ

山科厚安〔五六〕
山本封山〔八二〕
山本亡羊〔一四二〕
山脇玄心〔二五〕
山脇玄脩〔四〇〕
山脇東海〔一〇三〕
山脇東圃〔一一二〕
山脇東門〔六〇〕
山脇東洋〔四七〕

ユ

柚木太淳〔七二〕

ヨ

吉雄耕牛〔六八〕
吉田自庵〔三六〕
吉益東洞〔五一〕
吉益南涯〔八三〕
吉益北洲〔一三八〕

ワ

和田東郭〔七一〕

昭和十一年七月十日印刷
昭和十一年七月二十日發行

醫家先哲肖像集

定價十圓

著者　藤浪剛一

發行者　東京市神田區駿河臺三丁目六番地　關根喜太郎

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十一番地　白井赫太郎

發行所　東京市神田區駿河臺三丁目六番地　刀江書院
電話神田(三二七一)三一八九
振替東京七三一一八